

浄土

十二月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和三十六年十一月二十五日 印刷 昭和三十六年十二月一日発行

第二十七卷

第十一号

修養しめくり

◇日日の修養に無言の布教◇

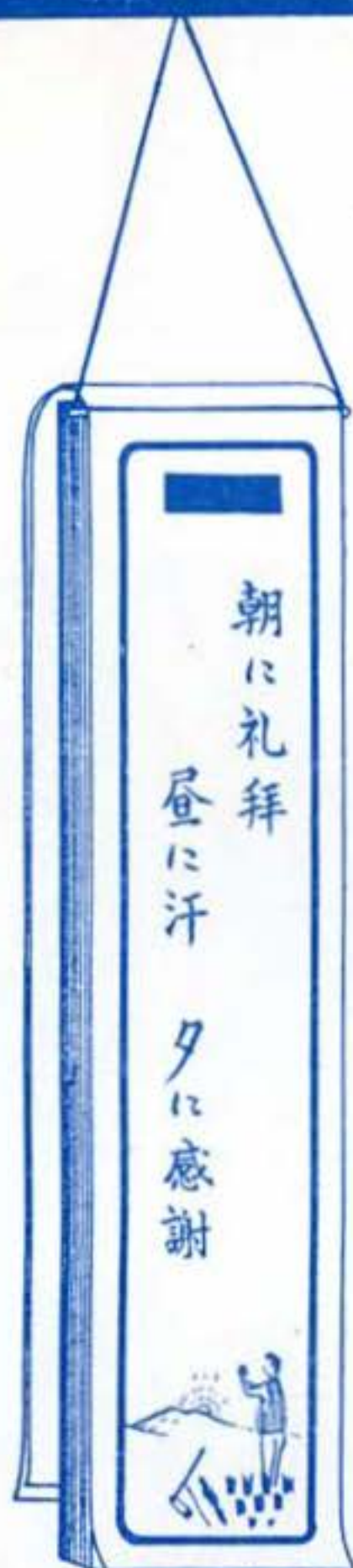
価格 一〇〇円 送料 四〇円

(一〇〇迄送料実費)

体裁 タテ 43 cm × ヨコ 14 cm 上質紙使用

美麗 二色刷 三三枚綴

割引 一〇部以上一割引 五〇部以上二割引



(内容見本)

予約者特別割引

11月末日までの申込者に限り部数を問わず
上記割引率プラス5分引と致します。

申込先 東京都千代田区
飯田町2の8

法然上人鑽仰会

振替東京 82187
電話 (332) 5944

浄土

十二月号

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。
法然上人御法語



中央アジア・コートンで発見された
絵画断片「馬」(紙本)上の文字はチ
ベット文字

浄土 十二月号 目次

表紙……菩薩半跏像(京都 宝菩提院)

生活のなかに生きる宗教……佐藤賢順……(二)

円空仏の微笑み……石上善応……(八)

人権と仏教……久家惺道……(四)

随想 先ず心の糧を……村上博了……(三)

近代高僧伝 越智専明……大橋俊雄……(四)

童話 二人のやくそく……みなくちまさひろ……(二六)

中国綺談 幽調「清秋月」……牧尾良海……(一八)

実話 銃の使い道……吉野翠幹……(三〇)

尊ぶべき宝庫……(三)

頭をやわらかく……(五)

多弁は煩惱のもと……(二七)

苦楽は偶然でない……(二八)

童心仏心……(二九)

扉の御法語……(七)

表紙の写真……(三五)

聖典 いつでも どこでも……竹中信常……(三六)

あとがき……(四二)



生活のなかに生きる宗教

阿弥陀経を語る

佐藤賢順

阿弥陀経は無量寿経・観無量寿経とともに浄土の三部経として、法然上人源空が選り出した經典であります。三部経のなかでは一番短い經典であります。無量寿経が阿弥陀仏の救済の働きである本願を主として説いており、観無量寿経が救済される人間の弱さはかなさという方面を説いて、どうしたら人間は救われるか、について、細々と述べているのに対してこの經典は、仏に救われた人々の清らかに楽しい生活を美しく描いているのであります。それでこの經典のことを「結経」といっております。このお経には、ほかのお経のように難しいことは少しも書かれておりません。美しく飾られた清らかな仏の世界で、楽しく暮らしていく日々の生活、すなわち宗教生活が描かれているだけであります。浄土教が目標とする宗教生活は、阿弥陀仏

に救済されてそのみ国、極楽浄土に生きることから、まずこの經典は極楽浄土の中心である阿弥陀仏（これを正報しょうほうといいますが）それからその仏の国土、大自然（これを依報えほうといいます）の美しい有様が次々に語られるのであります。そしてそれからそこに生きる人たちの宗教生活が語られるということになります。

そこでまず初めに阿弥陀仏とはいかなる仏であるか、について述べている一節を引きましょう。「舍利弗しやうりふつ汝が意こころにおいていかんぞ、かの仏を何が故ぞ阿弥仏と号なづけたてまつる。舍利弗よ、かの仏の光明無量にして十方の国を照らして障礙するところなし。この故に号けて阿弥仏とす。また舍利弗よ、かの仏の寿命及びその人民（の寿命）無量無辺阿僧祇劫なり。故に阿弥仏と名づく」ここに舍利弗よ、と

呼びかけているのは、釈尊が多くの弟子達に法を説いているのですが、そのなかの一人の舍利弗に呼びかけて、舍利弗よとしばしば呼んでいるのです。釈尊は舍利弗に、阿彌陀仏とはどういう仏かと問いかけるのですが、舍利弗が答えるのを待っていられないというふうに、性急に自分で答えてしまいます。このお経はそういう形式の經典です。この一節の意味は、かの仏を阿彌陀仏と名づけるのは、その仏の光明が無量であり、またその仏の寿命も、そこに生きる人々の寿命も無量である。だから阿彌陀仏と名づけるのである。というのであります。アミダブツダというインドの言葉は無量の仏という意味ですが、何が無量なのであるかといえますと、限りなく沢山の功德のあるうちで、とりわけて光明と寿命という二つの徳が限りがないというのであります。光明と寿命で代表させて、その徳が限りがないとするのであります。この一節は阿彌陀經のなかでは最も大切な一節で、この經典から最も重要な箇所をただ一つだけ選べ、といわれれば、だれでもこの一節を選ぶのであると思います。ここで阿彌陀仏は限りない光と限りのない命の仏と説かれているのであります。

ところで光明が無量であるということは、どういうことであるか、といえますと、その光が暗をすみずみまで照ら

して少しも障えられるところがない。今まで隠されていたもの見えなかったものを明かるく照らし出して、誰れにもわかるようにする、ということでもあります。ですから光明とは智慧といいかえても同じことで、光明は智慧の相なりなどといろいろの經論に書いてあります。光に照らし出されて物事の真実の相がわかるので、それを智慧というのであります。その次の寿命が無量であるというのはどういうことであるか、といえますと、人間や動物はいうまでもなく、植物や微生物に至るまで、生命によって生かされています。近頃では鉱物の結晶が生長していると説く博物学者もあつて、広い意味の生命が限りなく大自然を貫いて脉々として流れていて、それが生きとし生けるすべてのものを包み養い育て生かしているのであります。これを寿命無量というのであります。命はすべてそのものを生かし育てますから、これを慈悲心といいかえても同じことであります。しかしそれは人間の狭く片よった愛情などとは違つた純粋な深い愛情をいうのであります。そこで仏は光明無量であり、寿命無量であるというのは、仏は大智慧であり大慈悲である、というのと同じことでもあります。いいまでも、この智慧と慈悲ということは二つの別の働きではなくて、実は全く一つの働きであります。大智即大悲とか悲

智円満とかいいまして、ほんとうの知性とほんとうの愛情とが一体となるという所に仏道の根本の思想があるのであります。智慧は静かな觀照の態度でありますが、それが直ちに救済の實踐として働き出すというのであります。ほんとうに物事の眞実が明らかになれば、自分勝手、身勝手な考え方や振舞いを捨てて、その眞実に適^{かな}った實踐ができる様になる。智慧に磨かれた愛の行いが営まれなければならぬ。というのが仏教を通じての智慧即慈悲の教えであります。では智慧とは如何なることか、といいますと、大變むずかしいことで、大般若六百卷はこの智慧とは何かを説いているのですから、短い時間に簡単にお話することはできませんが、只今は、実相への随順、眞実の追及というだけにとどめて、おきましょう。智慧はどこまでも物事の眞実を追及するのですから冷静に熟慮し厳しく批判するのであります。これに対して慈悲は哀れみ抱き、救い導くのであります。古い歌に「父は打ち母は抱きて悲しめば、違^{ちが}う心と子や思うらん」というのがあります。これは、父の厳^{きび}しさと母のやさしさとがいずれも眞の愛情の両方面であることを表わしたので、子供にとっては父と母とは別の心のように思われるけれども、実は同じ愛情の表われである。というところを巧みに歌ったのであります。仏の

智慧と慈悲も二つの心ではなく、眞の智慧であるからこそ眞の慈悲として働き出すことができ、慈悲として働き出してこそ初めて智慧としての値打ちがある。ということなのです。

さて阿弥陀仏はこういう深い慈悲の仏でありまして、衆生救済の力として、生きた力として常に働きかけています。具体的にはこれを本願力とか誓願力とかいいます。そしてこの力を願海とか誓願海とかいって海にたとえております。宇宙そのままが仏のふところであり、十方世界そのままが仏の姿であるということです。常に素直にその力を受けとって、その導きのままに従っていくのが宗教生活であります。疑いや計^{はか}らいやためらいを捨てて、ひとすじに仏の導きに従うのが南無阿弥陀仏であります。その生活で人はいつとはなしに深い英知を授けられ、純粹の愛情に目醒めることができます。

そこで次の一節を引きましょう。

「また舍利弗よ極樂国土には衆生生ずる者は、皆これ阿鞞^{アビニ}跋致^ニなりその中に多くは一生補處あり。その数はなはだ多し。これ算數^{さんず}のよく知るところにあらず、ただ無量無辺阿僧祇劫^{そうぎ}をもつて説くべし。舍利弗よ衆生聞かん者はまさに

発願してかの国に生ぜんと願ずべし。ゆえはいかん、是くの如きの諸の上善人と俱に一处に会することを得ればなり。」この意味は、仏の国に生きる者はアビバッチの位、もう退かない位に進んだので、一生補処^{くそ}といって、この次の生涯には自分が仏になれる人々である、そういう人が無数にいる。であるからそういうことを聞いたならば、みなその国に生きようという理想を持たなければならぬ。なぜならば、このような高い位にまで進んだ諸の上善人と一つ社会に暮すことができるからである。という意味であり

ます。諸の上善人と俱に一处に会することをうればなり——これは非常に意味深い言葉で、上善人とは立派に人格を形成してもう逆転することのない人たちです。仏教でいう人格形成は、さきほど来^き、申上げてきたように、身勝手な利己心がある間は、物事の眞実^{しんじつ}はつかめないのですから、利己心を捨て去って、眞実を把握、それが直ちに私心のない愛情となつて働き出すそういう努力をすることが人格形成であります。仏の慈悲のうちに生きるとか浄土に生きるとかいう眞の宗教生活は、こういう人達とともに清純な社

頭をやわらかく

世には三種の人がある。岩に刻んだ文字のような人と、砂に書いた文字のような人と、水に書いた文字のような人とである。

世間には石頭と呼ばれる頑固な人がある。このような人を岩に刻んだ文字のようだという。岩の文字は刻むのに容易でない努力がいるが、一度刻まれたものは消すことができない。このように他人から忠告を受けたり、教えられたりしても、その人の頭には一向に入らないので、受け入れさせるのに骨が折れる

それでいて悪口等をいわれると、すぐ様頭に刻み込んでしまつて、消そうと思つても、容易に消せない。何時まで経つても腹を立てる。砂に文字を書くような人とは普通の人のことである。砂に文字を書くのは、容易に書けるが、またすぐ消えてしまふ、このように他人の立場も考え、他人の主張もよく聞く人である。また悪口等を聞いて腹をたてることがある。あつても、その怒りをたやすく消す人である。時には争いを起してやり合うけれど、後になつて仲も直り、もとのようにお互に平和に暮すことのできる人である。

水の上に文字を書こうとして努力しても、それでいて悪口等をいわれると、すぐ様頭に刻み込んでしまつて、消そうと思つても、容易に消せない。何時まで経つても腹を立てる。砂に文字を書くような人とは普通の人のことである。砂に文字を書くのは、容易に書けるが、またすぐ消えてしまふ、このように他人の立場も考え、他人の主張もよく聞く人である。また悪口等を聞いて腹をたてることがある。あつても、その怒りをたやすく消す人である。時には争いを起してやり合うけれど、後になつて仲も直り、もとのようにお互に平和に暮すことのできる人である。

水の上に文字を書こうとして努力しても、

会を作っていくことでなければならぬ。ということを阿彌陀經は教えているのです。

宗教生活といえますと、未来の国や天国や西方の世界においてでなければ、営むことができないように考えられますが、それはそれとして、宗教の実践的な働きが現実の生活に現れて、この世にこそ仏国土を建立していかなければならないのであります。宗教が基礎となって築いていく社会は、もちろん物質的な社会や政治経済的な社会そのままではありません。昔からインド以来、中国の浄土教系の祖師たち、世親とか曇鸞とか、わが国では法然や親鸞が一致して説いていることは、極楽浄土即ち理想世界は仏の願心が莊嚴している世界である、ということであります。願心莊嚴といえますのは、仏の衆生救済の大慈悲によって飾られている世界ということです。阿彌陀經にも極楽浄土を美しく説いたあとで、「かの仏の国土にはかくの如きの功德莊嚴を成就せり。」と四度も書いてあります。ですから宗教的社会は物質的に生活が充実し、貧乏や病氣や災害の絶無の社会であることは、勿論、望ましいことであります。が、その根底には眞実迫及の智慧に裏づけられた純粹の慈悲行がなければならぬのであります。

わが国は現在、物質的な感覺生活や政治経済生活と、そ

の下の深い所にある道德的、宗教的な生活との間に、大きな空隙地帯がありまして、上ずみの物質的な生活と、底の方にある宗教、特に仏教とは、全く無関係であるように思われます。宗教が少しも日常生活の力となっていないのであります。遺憾ながらこれが仏教の現状であります。これは致し方のないことであります。といいますのは、わが国は、西洋のように中世と現代との間に、長い近世という時期なしに、いきなり中世の封建時代から現代に飛び込んでしまったのであります。西洋は二百年にも及ぶ長い近世という期間があつて、その間に宗教と現代生活とを調和させるいろいろの苦勞をしてきたのです。例えば自然科学と宗教とか、資本主義と道德とかいうように二つを調和する苦勞を長い間経験したのでありますが、わが国ではそういう余裕が全くなかったのであります。そして西洋の上ずみの物質生活や政治や經濟を取り入れましたから、宗教がこれにいかに対応して、いかに社会生活の方向を定めていかなければならないか、ということについては、また深く考えられてはいないので、社会生活と宗教とは遊離したままになつているのであります。しかしこれからは今お話したような方向に向つて、阿彌陀經の教えるところに従つて、社会生活の指導理論を打ち立てていきたいと思ひます。

扉の御法語

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。(諸人勸化の御詞、勅修御伝第四十五)

禪勝房が上人に「現世をば、いかゞはから

ひ候べき」とお質ねしたら、上人は「現世をすぐべきやうは、念仏の申されんかたにより

てすぐべし。念仏のさはりになりぬべからん事をば、いとひすつべし」と教えられました

た。上人は常に平常の生活の中にあつてお念仏を唱えることを教えられ、お念仏の生活と

は何も特別なもの、普通人と異った生活では決してないことを繰り返して示されています。

誰にもできるし、またしなければならぬ正しい暮らし方がお念仏による生活である点に、お念仏の有難さがあります。

上人はこうした生活態度について、特に禪

勝房に教えられています。例えば

「いけらば念仏の功つもり、しなば浄土へま

づらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし」

「浄土門の修行は、愚痴にかへりて極楽に生まると心得べし」

「念仏申す機は、むまれつきのまゝにて申す也。智者は智者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲ありて申し、慳貪者は慳貪ながら申す」

等の御法語はいずれも禪勝房に教えられた御詞であります。

さて上人は現世を過すのには、念仏を中心

に考え、その障りのものは一切捨てよといわれました。例えばひじりでもよし、在家でも

よし、遁世してもよし、また妻があつてもなくても何れもお念仏を唱え易いようにしたら

よいので、こうした外見上の相異はどうでもよいと教えられました。つまり生活の眼目は

お念仏を申すことにあるのです。そして、これら生活態度の結論として「衣食住は念仏の

助業なり」といわれました。

助業とは申すまでもなく、五種正行のうちで称名正行を除いた他の四正行、つまり読誦

観察、礼拝、讚歎供養の四であります。従つ

て衣食住の三つともこうした正行に合致させるよう心掛けよということであります。しかしここではもっと広く、生活の一切をお念仏

を唱え易いように、お念仏を唱えることを中心にして、これを助ける行なりと心得よ、ということでありましょう。この御法語は更に

続きますが、その終りに次の一句があります。「もし念仏の助業とおもはずして身を貧求するは、三惡道(地獄・餓鬼・畜生に趣く)の

業となる。極楽往生の念仏申さんがために、自身を貧求するは、往生の助業となるべきなり。万事かくのごとし」

即ちお念仏を唱えない生活は、たとえ慈悲心があり布施を行う等の善事があつても、その他どんな忍耐と努力があつても、三惡道に

趣くというのです。すべての生活はお念仏を唱えるためにありと覺悟して暮すところに正しい生活があります。万事かくの如しといわれた御詞は、行住坐臥のすべてに、いつもどこでもお念仏を唱えよということでもあります。

食事の時も、ご飯をかみながらお念仏を申せとの御詞があります。こうなれば衣食住の一切においてお念仏ということになります。



(自刻像)

いくたびもたえてもたつる法の道

九十六億末の世までも

これは天台の修験僧円空が、自由奔放な仏菩薩の絵を大般若經の扉に描き、その奥付けに記した歌である。

私は五年程前、ある雑誌に紹介されていた円空の仏像に魅せられ、怪異とまで思われる像の中に秘められている力強さ、あまりにも自由なポーズ、木質を充分に生かした彫りの跡にただただ驚きの眼を見張ったものである。今や、円空仏は急激なブームにのり、所々で円空仏像展が開かれるに至ったのは、喜しい現象の一つではある。しかし、それを観る者は現代彫刻に匹敵するモダンな手法に

円空仏の微笑み

石 上 善 應

感心し、その新鮮な技法が二百数十年以前に変わった僧侶によってなすとげられているのに感嘆はするが、異常なまでの一生に十二万体を製作しようとした悲願や、その本質を見極めようとしなないのは遺憾なことである。だが、現代人が現代の眼で円空仏を評価したればこそ、このようなブームになったのであれば、一概にこのことをせめるわけにはいかないのではあろうが。

円空の正しい生涯は判らないが、幾つかの伝記を頼りにすれば元禄八年（一六九五）七十八才ぐらいで入寂したことになる。しかも、その一生は造像と廻国にあけくれている。尾張の高田寺で修行し、ここの開山といわれる行基の生涯に強く感動し、仏像十二万体の造像を発願したという。彼の精力的な活

動は仏像の分布している所を知るのみで充分である。岐阜、愛知、三重から東進して、東北、北海道に至るまで、二千余体が現在発見され、さらに続々と発見されつつある。事実寛文五、六年ごろ北海道にわたり、開教と造像とに従ってもいるし、飛騨一帯の円空仏の量にも驚かされる。

私が円空の仏像を見て、その技法に驚き、その破格さにうたれたが、さらに心を動かししたのは、廻国布教の一事であった。岐阜の土地の人々は円空と彼の仏像を併称したかのように「エンク」さん、「インクウ」さんと呼び、「草分け上人」、「窟上人」とも呼んでいる。北海道ではアイヌの尊信を受けたのか「今釈迦」「今行基」とも呼ばれていたという。仏像のみではなく、村や部落の開発につ

とめ、難民の救済にも大いにつくしたという。これあればこそ、人々から親しく呼ばれ尊称をも受ける理由がおのずから知られてくるのである。東奔西走し、造像を自分の行と考えて専心している間に、人々の難事に手をさしのべる真剣な思いやりが村人の心をゆさぶらないわけがなからう。今でも、一見奇怪と見える仏像が長い年月を経て伝わってきているのにも、このような結びつきを度外視しては考えられないことである。僧たる者の今一つのありかたが、円空によって示されているように私には受けとられるし、また、このことがより一層、円空仏への魅力となった大きな理由の一つでもあったのである。

円空仏を見て、私たちがまず驚くのは、あまりにも自由な仏の相好やその様式についてである。飛鳥の仏たちには異国風の洗練された味わい深い仏像であっても、その形式もきわめて自由で、広隆寺の弥勒菩薩も如意輪観音でもよく、法隆寺の百済観音も台座のところに虚空蔵菩薩と記されていることから、まだ様式が一定していなかったことが知られる。それが白鳳、天平とくだるにつれて儀軌

に従った仏像が、いわば形式化された仏像が仏師たちの手によって作られるようになったわけである。一度、固定化すると人間はそのイメージにとらわれて、自由な姿態の仏像を彫刻することはなかなかむずかしい。また、人々も釈迦如来はかくかくの形であり、阿彌陀様はこのようなポーズであるときめてしまい、それに少しでも違いがあれば、それはおかしいと排斥する傾向がある。このような伝統性が仏像彫刻を長い間にわたって保存させてくれたが、その反面、技術は進歩しても芸術味の乏しいものとなって行ったことはいなめない事実であろう。しかるに、円空仏には



尼 僧 像

そのような固定化したものは見あたらない。横むきの菩薩像、持物も定かではなく、背面に記された円空の直筆でそれと知る仏像、トテム・ポールを思わせる細長い地藏像や諸天像など、非常にユニークな仏像ばかりである。岐阜県清峰寺の聖観音像の少しく横むき

の顔で合掌している姿は秀逸である。鼻の横皺や眦のしわの刻みなど惹く力強い鑿の運びの中にもこまかい神経の使いかたがありありと偲ばれる。必要がないと感じたものはすべてスポッと捨てていればこそ、そのこまかい表情が強く浮き出てくる。人間、一度身につけた知識はそう簡単には捨てることができない。どうしても、もの知りになればなるほど決断できず、こたわってしまう。ほんものの知恵ではないからである。法然上人が称名を選択されたことのなみなみならない境界を知ることができる。そこでは宗教の世界も芸術の世界も全く一つである。同じく不動堂の尼僧像、神明神社の自刻像（子護り像と呼ばれる）の上向きの顔の中にただよう柔らかな微笑も忘れられない。

円空仏の技法は関東を中心に分布している、俗に「鉈彫り」様式といわれるものに属する。鉈で彫ったような粗い目のある彫刻。その粗さが明王や諸天像には怪奇な感じを与えるほどに強烈である。伴高蹊の「近世畸人伝」に「円空の持てるは鉈一丁のみ、常にこれをもて仏像を刻むを所作とす」とあるが、

その作品の彫りの運びを見ると、五、六本の鑿を用いていることは間違いない。しかし、世の彫刻家が少くとも二十本の鑿を使うのと比べれば、鈍一丁のみという表現もあながち誇張ではない。その鑿の運びも大胆率直ともいうべき、まさに単刀直入の見事さである。慎重な態度というより、ねらいをつけたら一気呵成であるから、彫る仏体も数多い。滋賀県にある、五尺八寸ほどの十一面観音の背部に元禄二年三月七日と記され「四日木切五日加持、六日作、七日開眼」と墨書されている。実にわずか二日たらずで、この等身大の像が製作されている。円空の悲願が十二万体の数多くにのぼっている結果、こまかい造像の技術は当然捨てさらねばならなかったが、そのことがみずみずしい、新鮮な、しかも強烈な、見る人をして忘れることのできる印象をかもし出すこととなった。造像の早さがズバリと入れる鑿の跡をいやが上にも浮き上らせる。数本の鑿が躊躇せずに、矢つぎ早やに動いてみるみるうちに造りあげる仏体に、魂の脈々とした仏像ができ上るのもむべなるかなである。

円空仏のもう一つの特徴は、木質、木目を充分に利用した点にある。名古屋の荒子観音寺の護法神像はその焰髪が、木目や節を上手に利用した曲型的作品であろう。同じく慈恵大師像は正面を向けば口もとに木の節があた



十一面観音像

る。それを見越して初めから横回きの像を作ったのにほかならない。このような作品は決して数少ないものではない。円空がことさらに木の節を利用しようとしたのではない。鈍で立ち割られた原木が、時には三つ割り、時には四つ割りされて、そのすべてを余すところなく彫り刻むところから生じてくる必然的結果なのである。原木のすべてを仏体に刻む。円空にとって、その原木がすでに敬虔なものであるからで、材質を選んで長い年月をかけ

て一つの像に打込む芸術家とはおのずから相違がある。もちろん、彼の悲願のためには量が問題である。だから、なまの檜材が好んで使用されている理由でもある。鈍で割って自然に生じた木理の線条がそのまま衣文に利用されている点もすぐれた造型である。そのもつとも単的なものに、「木っ葉仏」「木っ葉さま」と村人から愛称されている、ほとんど顔のみに鑿を施した、さながら木っ葉のように可愛らしい仏像がある。千差万別のお顔を愛すべき仏様であるが、仮にこの「木っ葉さま」のみが残って、ほかの仏像が消滅していたら、円空の名も今日には伝わらなかったのではあるまいか。

円空仏のお顔は、どれを眺めて見ても純粹に日本人の、とりわけ、働く農夫の中に見られる素朴な人たちの顔そのものである。円空は村人たちと一緒に生活した。その表われが仏像にかさなっただと考えてよかろう。訪ねてきて老人に仏の道を話したこともあろう。老婆の愚痴に耳を傾けたこともあろう。場合に

はその人たちの追善をこめて刻んだ仏もあるだろう。鼻筋の低い、小鼻の大きい仏像のまたなんと数の多いことか。十二神将や神像にはとくにこの傾向が強い。中でも音楽寺の護



十二神将

法神像は実に愛すべき顔である。頬骨の出た臍にしわを寄せた顔は見事な老婆の顔であり、鑿の運びも一段とさえている。このような親しみ深いお顔の仏像を見て、村人たちは非常な親近感を感じたのではなからうか。村人とともにある円空がこれらの仏像を通してはつきりと知られてくるのである。

原木を三つ割りなり、四つ割りなどして、組になった仏像を作る場合もあるが、私が見てほほえましく感じたのは、明福寺の両面如来像である。片面は薬師如来、片面は阿弥陀

如来で等身大でもある。弥陀の印相も両手を真中に掌を外に向け、人差指を折って親指につけているのは現代の抽象彫刻と少しも変わらない。体が悪ければお薬師様を、不安な時は阿弥陀様を、その時によって文盲な村人の不安を除いてやろうとしたのではあるまいか。黒光りした仏様は確かに香煙でくすぶられ、長い間、拝まれてきたことがありありと知られてくる。香煙でくすんだ仏像は一見奇怪な容貌の明王や諸尊像と、柔和な仏像の両極端なものにある。怪奇な仏像は魔よけとして、靈驗あらたかな伝説を数多く持ち、柔和なそれは守り仏として親しくまつられている。円空がことさらに刻んだ怪奇に見える像の背後にも柔和な仏のほほえみが秘められている。明王の忿怒相も慈悲の表われと理解している私たちにとって当然のことである。きびしく叱る母親が愛情をうしろに秘めていないわけがない。まさにそのような怒りの顔なのである。アルカイック（古拙）な仏の顔にただよえるほほえみは、飛鳥のみ仏たちをそぞろ思い出さずにはおられない。

微笑というものは本来、人と人とのふれあ

いから始まる。宗教も芸術も同じく、人と人とのふれあいを通して真実なものとなる。村人を愛し、仏道の追求に余念のない円空の廻国巡歴はまさに尊とき仏者の歩みであり、芸術と一つに融けあった大らかな世界の足跡でもある。ここで冒頭の歌を思い浮かべてみるに、当時ひしひしと迫ってくる危機感を味わいながら、いくたびもたえてもたつる法の道と詠う迫力が名も無い僧である円空を動かしていることになる。仏を刻むそのことが菩薩行であつたのである。名も無き寒村に円空仏がまつられ、人々の尊信を受けている現在、円空の行は見事に花を開いている。三角形の利用、空間の扱いの見事さが現代彫刻に通ずるという現代の眼のみで見直す私たちにとって、彫ることが仏道としてうけとり、一人でも多くの人々に仏の道を示したいと念願した円空の誓いをはつきりと把握せねばなるまい。と同じように、廻国して念仏をひろめようとした徳本行者たちのかくれた僧侶のあることを、あらためて見直すことが必要である。一事に専心することが仏道になるのであるから。（大正大学講師）

随 想

先ず心の糧を

村 上 博 了

二

どこの国でも人類の社会にあっては、宗教（仏教）が社会生活の糧となっている筈である。この意味で情操教育の中心は宗教であり仏教である。三つ子の魂百までと云われることは胎教から始つて幼児教育はやがてよき青少年へとなる在り方を示すものである。寺院の絵のあるところに子供の姿のないものはない。年よりと子供は寺院（神社）につきものである。こゝに知らず／＼の間に心のかてができ、家庭教育の在り方がみえる。

釈迦如来によつて説かれた仏教が、印度、シナ 日本と弘まつてはきたが、どこの国でも否定し去つたと云うところはない。信仰は太古の「火を拝む」時代から現代社会まで生活の中軸となり情操教育の骨目となっている。偶々廃仏はあつてもそれは信仰として、はなく、政争の一つとしての結果であつた。その国でもすぐに仏教は流行し生活の中心となつていったのである。

三

情操教育については、花いっぱい運動、小鳥飼育のこと、動物愛護週間さては日曜参詣

一

今や師走・極月とも云う。併し季節の名称から見ると旧暦では、まさに中冬である。きびしい寒さもこれからと思われるが、やがてそれも新春を呼ぶ基盤なりとする時、きびしい寒さを凌いで春を待つ梅の花や実を思わせるところに似た、なにかしらほのほのとしたものを感じる。

新聞やラジオに、すくなからぬ善行の話をきく、全く嬉しいものである。日本が大国か否かを論じ合う前に、日本人がよき共同生活体の一員として、自からも人さまからも「立派な行」とされることが多く伝えられることは、大国への一步健全社会への一段階として大変有難いものである。

その反面に、非行犯罪の白書にいたっては

余りにも暗い話が多すぎる。将来のわが国を双肩に負うべき青少年が、希望のない生活、タガの弛んだ我儘な暗い生活の結果、社会生活の害毒となつていくものが甚だ多い。新聞に某識者の言ばとして「非行少年について、いまさら環境がどうだ、といつてみてもどうにもなりません」とある。

併し事実がそうであるからとして、ほつておいて仕方ないとしてよいものであろうか、お掃除はいく度やつてもわるくはない、よりよき生き甲斐のある社会へ、よりよき生き甲斐のある生活は絶体に復調出来ないものであろうか、私はこゝで宗教家仏教家と云われる人々の奮起をねがう。宗教なり仏教なりこそまがれるを匡す唯一無二の良策であり、人間本来の姿に戻す妙薬ではなからうか。

なぞと、いろいろと実施されている。併しその中心は宗教情操教育で、物を粗末にしな
い、生きものを可あいがることに起因しな
ければならない。その第一階として私はこゝで
は先ず国旗「日の丸」の尊厳を提唱したい。
国のしるしであり日本人のシンボルであるか
らである。どこの国民であつても国旗は大切
にしている。最近我が国では祝祭日にさえも
国旗を立てない家が多い。たまに立っている
と奇異にさえ思われがちである。かような状
況では一国として誇りがなく、なる。心
に誇りなくその時まかせの生活としたなら
ば、希望の将来はないこと、なる。

浄土宗祖和順(円光)大師二十五霊場第十
二番札所に勢州山田外宮大鳥居前に欣浄院が
ある。時は今から七百八十八年前の承安五年
春三月、宗祖大師四十三才、お念仏が阿弥陀
如来出世の本願力と確認され、如来の本願力
を信じてお念仏を申すならば、必ず往生する
その功力は還相の功德となることを天下に宣
言し、その喜びを伊勢大神宮に祈誓したので
ある。翌朝大日輪のたゞ中に六字の名号南無
阿弥陀仏が感見されたのであつた。神宮に保

存されたが現在は欣浄寺に什宝として「日の
丸」名号が伝えられている。

議会に於ける議員、学校における先生、職
場、家庭に於ても、先ず国旗を尊び、日の丸
のように明るく正しく和やかに、ビチビチ
と明るく活動すべきである。

日の丸については 戦争時の暗い思い出も
あろうが、時の人の「あやまち」であつて日
の丸そのもののあやまりでは断じてない。

使用したその者に悪いところがあつた訳で
ある。仏教徒は日の丸についての悪感情を清
掃し、本来の美しさに払いきよめて、先ず国
旗の尊厳を確立すべきである。

四

人類のあるところ、宗教がない国は無い筈
である。いかに科学がすゝんでも或は無神論
唯物観の人々と雖も、宗教を人生から抹きつ
することは不可能である。

我々は木のまたから生れきた訳ではない、
父母がある。愛する父母に先ず感謝をさゝげ
うやまい仕えることは当然である。社会福祉
がいかによい、血をわけあつた親子の
関係は、子供として父母を敬い大切にするこ

とは人間として当然なことである。

若しも親子の関係が、動物のようで正しい
姿で無く、やさしさもない。ひややかなもの
であつたならば畜生道と云うこと、なる。嘆
くよりも腹が立って仕方がない。

彼岸があり盆会がある。正月があつて歳暮
がある。この年中行事をよく生かすことに、
人間のよろこびがあり、特色があり進歩向上
がある。

五

信仰は自由であつて、他のなん人からも、
命令やせつかいをうけるものではない。日本
憲法にも「信仰の自由」を謳つて、法律に優
先している。おがめば病気が癒る。お金が何
ん倍にもなる。或はお金持となると云うよう
なことは、信仰でも何んでもない一種のペテ
ンである。利をもつて誘うことは、或は誘わ
れることもよき人間としては恥であり不幸で
ある。

ペテンに色づけられた生活には、真の幸福
がない。

心寛かに胸を張って天下の大道を活歩する
生活にこそ真の幸福はある。



人権と仏教

久 家 惺 道

よく「戦後強くなったものは女と靴下である。」と云われる。靴下が強くなったのは科学の進歩によって繊維の種類、素質が改良された故であろうが、婦人の地位が向上し発言権が強大化されるに至ったのは、立派に法律で裏づけられている。日本国憲法第十四条には、国民は法の下に平等であつて、性の別によつて差別待遇を受けることのないこと、第二十四条には、婚姻は両性の合意のみに基いて成立し、夫婦は平等の権利を有する旨が規定されている。又刑法の姦通罪の条文も削除された。勿論明治憲法のもとにおいても、女性の権利が全く無視されていた訳ではなかったが、例えば妻の法律行為には夫の同意を必要とするとか、姦通罪は、妻が夫以外の男性と性的関係を持った場合に成立するが、夫が妻以外の女性と関係しても成立しないというように、男女間に著しく不公平な取扱を受けてい

た。これは必ずしも人間としての女性の地位を軽んずる意図で立法されたものとも云えない。寧ろ、夫に対する妻の地位という問題であつたと云うべきである。即ち夫の知らない間に妻が勝手にその財産を処分したり、夫以外の男性と特殊な関係を結ぶというようなことは、夫婦間の感情愛情にヒビを生ぜしめ、ひいては家庭生活を破壊するに至るというので、これを防止するのが理由であつたらしい。しかし、夫が妻に知らせないで勝手に財産処分したり、妻以外の女性と交遊するが如きは結局同様な結果を齎来することとなる。殊に個人より家を重んじた当時において、婿養子が妻に黙つて家重代の資産を売り払つて蓄妾したり、女道楽に蕩尽したりしたらその弊害は一層大であつた筈である。余りにも亭主関白式の男性中心に偏した立法であつたというの他はない。戦後に至つては男女の法的地位は全く

平等となり、人間は両性平等の立場において各の権利が尊重され、保障されることとなったのである。憲法第三章第十三条乃至第四十条の条文が具体的にこれを規定している。基本的人権という。即ち、人間が人間であることに基いて当然に享有すべき権利であり、人間として生きるための必然的な権利である。国法は更に人身保護法、人身保護規則を別に公布して人権中特に人身拘束についての保護に当り、中央及び地方方法務局に各々人権擁護部を設置し、また人権擁護委員法を公布し、各弁護士会及び全国市町村に人権擁護委員多数を置き人権の保護に万全を期している。終戦時に至るまでの軍隊、警察、検察関係等において如何に人権が軽視され、蹂躪されて居つたかを知る者にとってまことに革命的改革というほかはない。

然らば個人の権利というものは絶対的のものであって、無制限に許容され、保障されるものであるかという、それは行かない。私は私の生活上の幸福を追求する権利を有するものであるが、それがためには他人の生命を奪ってよいのか？ 私は私の人権を擁護するために他人の人権は侵害しても差支ないのか？ 例えば、或る人が他人の生命、身体等を犠牲に供し若しくは他人の所有権を侵して逃避しなければ自分の生命、自由等を失わなければならない

ときは緊急避難行為として、また他人から不当の攻撃を受け自己又は他人の生命、自由、身体、貞操等が危殆に類した節にこれを防禦する唯一の手段として為した行為は正当防衛行為として或る制限のもとに許容される。又例えば、或る人が居住の権利があるからといって他人の所有家屋内に家賃を払わずに住んでいることは許されないし、公道に面した土地の所有者は、その奥に存在する出入口のない袋地の所有者または居住者のために、自分の所有土地の一部の権利を犠牲にして通行させなければならない。個人の権利は、他の個人の正当な権利を侵害する限度及び公共の福祉に反する部分については制約を受けることとなるのである。「公共の福祉に反しない限り」「濫用してはならない」「法律の定めるところにより」等の憲法の条文は個人の権利を制約した法文である。要するに人権とは、私は「自己の人格の認識と個性の尊重である」と信ずる。

私は、三鷹事件や松川事件等について、その犯罪事実と被疑者との関係を調査したことも研究したこともないのでその知識は至って少いし、またその裁判の当否を批判する意嚮は毛頭ないが、「疑わしきは罰せず」の刑法の原則によつて無罪判決が云い渡されたことを一応納得する。列車が顛覆し、多数の死傷者を出すという大椿事が発生し、而

もそれが自然の事故とか、機械の故障によるものではなくて第三者の作為に縁由したという事実が明かであり、検察当局が必死になって犯人を捜査した結果であるのであるから、無罪判決を受けた人達の中に絶対に真犯人は居ない、とは云い切れないかも知れない。けれども万が一にも全然関知しなかった無実の人が仮令一人でも極刑または長期の拘束に受ける刑に服さなければならぬとしたら、まさに小説巖窟王の現代版であり、最大の人権無視であり、真に人生の悲惨事である。この意味において、何人もが納得できる証拠によって、犯罪が被疑者の行為であることの立証がないとすれば、矢張り人権擁護の立場から、無罪の判決を聞いて、吻とした気持になるのである。

仏教において大衆の人格及び権利は如何に見られるか？一切衆生悉有仏性ということは、人類のみに限らず禽獸等一切の生物の本質に於て尊貴な仏性の具有を認めたものである。個人の権利を主張し、擁護するには、反面に他人の権利をも認容し、尊重しなければならない。自行化他、自他兼済を大目的とする仏教こそ最大最古の人権の擁護者である。明治の頃、福田行誠上人が両国橋の上で座って物乞うた乞食に手を合わせられたという。まさに乞食の人格を認め、内在する仏性に合掌なされたのであろう。平安の末

白拍子祇王御前なる者が「ほとけも昔は凡夫なり。われ等もやがてはほとけなり。同じく仏性具せる身を」と謳ったと云う。一切衆生悉有仏性で人権の平等を力説したものである。ただ仏教では兎角自分を犠牲にしても利他に励むことが菩薩の行願である、とされているので、あたかも自己の権利の主張に対しては極めて緩慢であるかのように見える。しかし、浄土宗祖法然上人が、弟子の過罪に連座させられ、流刑に遇われるとき、「一時、念仏を唱えることをおやめになられたら」との進言に対し、「たとい死刑に行われるともこのこと云わずばあるべからず」とて、念仏の停止を肯んぜられなかったということは、上人の不退転の御信仰の発露であると共に、そこに儼然たる人権の宣言があつたのである。憲法第九十七条には「この憲法が日本国民に保障する基本的人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて」と規定されている。世界の有力諸国における人権の保障は、数百年間にわたる自由獲得の闘争の尊い結晶であり、何十回かの過程を経た漸進的改革の成果である。我が国が、たとい建国以来最初に味わった敗戦と、外国軍隊進駐という非常態勢下にあったとはいえ無血で国民に与えられたようなことやさしいものではなかった。「人類の多年にわたる自由獲得の努力」という短い

文章の裏には、どんなに多大の血が流され、多彩な闘争が繰り返されたかを銘記すべきである。闘争もなく、流血もなくして、数千年の昔から、人間平等、一切衆生悉有仏性の大理念が一貫した背骨であったということは、まことに仏のみ教が卓越し、慈悲が広大なものであるかに驚かされる。

国法は一国の安寧秩序を維持し、政治の運営の円滑を期するものであるから保障する権利は具体的にこれを条文にするものであるから保障する権利は具体的にこれを条文に

多弁は煩惱のもと

自ら制えることと、多弁ならずして黙思することとは、あらゆる繋縛を断ち切る初めである。

繋縛とは何かが身心にまといいついて自由にならぬことである。われわれの身心は常に自由でなければ正しい考えもなく行動もない。しかし実際には煩惱が十重二十重にまつわりついて、全くのところとは多弁の反対で、いらぬ言葉を不自由である。即ち実際のわれわれは繋縛によって動きのとれない

心と身体をもっている。この繋縛を取り除くことは実に容易なことではないけれども、少しでも自由になり、正しくありたいという努力がなければならぬ。この努力の第一歩が自制と寡黙と正思とである。自制とは反省である。放縦と

いう悍馬にまかせて暴走させない轡のことである。自分の欲望や動作が自分の思うように制御できな

規定し、これに違反する場合には刑罰を科するのが原則である。これに反し、仏教は自他の人格を尊重して社会生活を豊かにし、仏果を成ずることをもって目的とするが故に、戒律の条文においてもこの目的達成のための禁止規定が定められてはいるが、しかしこの禁則を犯した場合、直接人が人を罰する規定はなく、悪因は自然に悪果を招来することとなる。波羅夷罪という大罪を犯すこととなるとか云ったような因果応報の自然的懲罰に委せられているように思われる。元々「人類多年にわたる努力」によって獲得された自由と権利は、自己が生存する必要のためであり、他人の自由と権利の尊重や公共福祉ということとは第二義的のものである。然るに仏のみ教は、上求菩提下化衆生の理想実現のために、社会福祉を念じ、利他を本質とするものである。自他の人格を尊重、権利擁護と云っても、両者全く出発点と目的を異にしているのである。仏出でまして二千五百余年。末法万年の弟子の私共には仏のみ教を仰ぎつつも、教え給うた行、定め給うた禁令に堪える機根ではない。仏の教を体し、その大目的に少しでも念じながら「人類多年にわたる努力」の結晶と成果を恭しく甘受し、自他の自由と権利を尊重して善良な日本人・善良な人間として生活いたしたい。

(教学部長)

中国綺談

幽調「清秋月」

牧 尾 良 海



れぞれ眠りに就いた。

間もなく夜が明けそめて来た。四辺には人の影一つなく、荊棘の生い茂った荒野が見はるかす限り続いていた。

ちようど折良く一人の樵者が通りかかったので、本街道へ出る径を訊ねると、

「私の住居はここから大して遠くありませんから、暫らくそこで休息なさって、朝飯でもすませて御出かけになったらいいでしょう。」と言って呉れた。

范敏は喜んでその好意に甘えることにした。樵者に随って二三里ほど行くと、その家へ着いた。田舎屋ではあるが、大層清らかな感じの住居である。樵者は、

「私はまだ仕事があるので外へ行きますが、どうぞこゆるりとお寛ぎ下さい。」

と言ひ残すと、又姿を消した。

女中らしいのが急いで席を用意し、色鮮やかな朝餉が並べられた。

この時、一人の女性が隣室へ通ずる戸口の蔭から范敏たちの方を覗いた様であった。よ

齊の国に范敏という人があった。博く経史の學問に通じていて、かつては州の推薦で省の役人になったこともあるが、失敗があったので思わしくなくなり、元の住所へ帰ってぶらぶらと日を送っていた。

ある日のこと、所用があつて、鄆という所へ出向いて行った。

晩秋のこととて、つるべ落しに早くも日が暮れてしまったが、泊る所もないので、星や月をたよりにひたすら夜道を急いだ。そのうちに折悪く月も浮雲に蔽われてしまい、天地がすっかり暗闇になってしまった。

この時突然に、一羽の鳥がぱたたと乗っていた馬の首にぶつかつて来たので、范敏は急いで馬からおりてそれを捕えた。大きさは鶉

ぐらいだが、何という鳥なのか判らない。それを下男の懷の中へしまわせると、又馬に乗って進んだが、暗いのでいつか街道からそれてしまったらしく、こうなつては馬まかせて先を辿るより仕方がないと覺悟をきめた。

暗闇の遙か彼方に人家の灯らしいのがちらちらと明滅したので、これに勢いづけられて馬を急がせたが、何里か先へ進んでもその灯火はますます遠くなる様である。范敏は、これ以上夜道を行くのがいやになつて来た。下男の方も疲れはてて、もう歩く氣力もないらしい。そこで、ええままよ、少し寒いがここいらで野宿することにしようと、馬からおりた。馬には勝手に草を食べさせておいて、自分には鞍を枕にし、下男は木にもたれさせ、そ

くは見えなかったが、頗る妖艶な顔立ちの女らしかった。

食事が終ると、香り高いお茶が出され、そのあとに今度は酒の仕度が運ばれて来た。

范敏は、五六杯それを飲んでから、隣室の主に向つて扉越しに声をかけた。

「道にはぐれた私共、たまたま御当家に御厄介になりましたが、鄭重なる御歓待に預りまして、何ともお礼の申し様がございません。」

女は、姿を隠したまま隣室から答えた。

「立派なお客さまがおいで下さいましたのに、見るかげもないあばら屋のこととて、充分なお構いも叶いません。笛が好きなことはかねがね承わっておりますので、何か一曲横笛をお聞かせ申して、せめてお酒のお肴になりと致しましょう。」

耳を澄ましていると、やがて、曉曉と清く、細く、時に又雄壮急調に、妙なる笛の調べが聞えて来た。曲節は巧妙精美を極めていたが、何という名の曲なのか、これまで耳にしたこともないものである。

「何彼と御厄介をおかけしたその上に、今は又お笛の妙曲でお酒を賜わりました、何とお

礼を申してよいのやら判りませぬ。大変失礼とは存じますが、親しく貴女様にお目通りし、お礼を申し上げてから帰ることができませんれば、願つてもなき幸わせに存じます。如何でしょう、お目にかかる訳には参らぬでしょうか？」

「そんなに仰言っていたくのは、本当に身に余ることでございます。でも、こんな田舎におりますので、髪も顔も垢まみれでお恥ずかしうございます。少しはおつくりして参りますからお待ち下さいませ。」

女がこう言ったので、范敏も身繕いし威儀を整えて待っていた。

やがて、女が出て来たので、范敏は正式に挨拶のお辞儀をした。言葉遣いやそのしぐさの中にも洗練された気品が感じられた。高々と髻を束ね上げ、びんは濃く浮き立たせてあり、すずしい双眸に柳眉も青く、形の良い唇が一点の紅いを副えており、范敏は三十歳になる今日まで、かくも美しい女性を見たことがなかった。女は女中に命じて、又酒を取り寄せた。

范敏は、眩しいものでも見る様に女に向つ

て言った。

「夫人は、きっと宮廷にお仕えになった方だとお見受け致しますが。色々と承わらせて頂けましょうか？」

「急にこんなことを申し上げれば、お客様がびっくりなさるに違いないと思いますが、貴方様が歴としたお方ですから、申し上げても構いませんわ。昨夜は特に錦衣児をさし向けてお迎えしようとしたのですが、誤って貴方様の御乗馬に触れてお捕えになりました。実を申せば妾は、五代唐の御代の莊宗皇帝様の宮中内楽部、お笛方筆頭を勤めた李夫人でございます。」

女性のこの言葉で、范敏は内心慄然としてこの女は今去る数百年も古えの幽鬼に違いないと悟り、精神を鎮め、身を正して緊張した。

「先程お聞かせ下さったのは、何という名の曲目ですか？」

范敏が訊ねると、

「あれは莊宗皇帝御自身の作曲で、『清秋月』の曲と申すものです。帝は、月光の美しい夜には、必ずと言っていいほど御自らお笛

をなさいました。秋氣の清涼な夜には、月光も愈々冴えて澄みわたり、笛の響きもますます高く、それこそ秋月と感應するかの様に高鳴りを致しますので、曲名となされたのです。こよいも月の美しい晩ですから、貴方をお泊め申して、つれづれのお慰めに二三曲調べて進ぜましょう。」

さてその後朝、范敏が別れを告げて帰ろうとすると、その女は又奇妙な告白をした。「妾は、そのうち不幸にも悪い奴に力で脅やかされて、今ではその男の側室にされておりますのよ。」

では責苦を受けねばならないのです。」范敏は、李氏の夫の留守をこれさいわいに、ずるずると十日余りもその家に流連していた。こうしているうちに、或る日のこと、女中があたふたと二人のいる所へ馳けこんで来て「大変です。將軍が帰ってみえました。」と報告した。女は大急ぎで自分の部屋へ入ってしまった。やがて、甲冑をつけた容貌峻偉な將軍が戟を手にしてそこに現われ、

范敏が、英武で用兵の巧みな莊宗が位に即く前には苦心慘憺して周辺を攻略したのに、一旦天下の權を握ると、歌舞音曲に心を奪われ、前後を忘れて国攻をあやまった理由を訊ねると、宮中に六年も居たというその女は、音楽好きの帝の日常や、宮中内帑の窮乏のこ

「齊王の甥に当る田權です。その叔父を殺害し、のち、韓信の兵に殺されたのです。彼は今、陰府へ行つて罪を受けていますが、叔父を殺した為です。」

「何ぞか娑婆の人間臭いが、どうした訳じや？」と怒鳴つてあたりを見廻していたが、忽ちそこにいる范敏の姿を見付けると、戟を向け

と、兵乱が起り、乱賊が宮中に攻め入つて帝を殺害した血惺い当時の情景を、涙ながらに物語った。女は、その時後宮に闖入した賊の

「戦国時代の史伝に見える田王から今日までは千年余も経っているのに、田權は未だに生れ替ることができないとは、どういう訳ですか？」

と怒鳴つてあたりを見廻していたが、忽ちそこにいる范敏の姿を見付けると、戟を向け

武將にさらわれて、ここにやつて来たのである。

「陰府では、人を殺すという罪が一番重いのです。田權は叔父を殺したのです。その叔父は既に人間界に往生して、もう二十余世にもなるのですが、田の罪状書はまだ残っているのです。その為、往生して人間界に生れ替

李氏は部屋の中から慌てて救いを求めて叫んでいた。

その夜は、范敏は女にひきとめられるままにその家に泊った。翠張紅闌の中でのあれこれのことは、風教に憚りが多いので、人間の歡樂の限りを尽したとだけ述べておこう。

責苦を受けねばなりません。これは始めれば一年間で、もうあと少しの間ですが、それま

「誰か来て下さい！ 房国公様はどうして来て下らないでしよう？ 若し万一の事が起れば、災難がお隣りにまで及びますのに！」この時、突如として、衣冠をつけた、見る

からに厳めしい巨漢が現われ、いきなり馳けよって將軍から戟を奪うと二つにへし折り、將軍を地上に押し倒して罵った。

「この妖怪めが！ 千年余もここに幽囚されていて、なお過ちを悟らずに敢て正人を辱しめようとするのか？ 貴様の家の者がちゃんとした人をここへ誘いこんだのだ。さもなくば、何条もってこの人がここへ来ようぞ？ 貴様がよく己が家人をしつけておかぬ故にこんなことになるのじゃ。」

尊ぶべき宝庫

自らの欠点を指摘し、悪を叱責してくれる人に会ったら、宝庫を示してくれる人のように思い、尊び仕えよ。

誰れでもといってよい位に、多数の人たちは自分の欠点を指摘されると不快を感じます。まして自分の悪い点を叱責されようものならその人と喧嘩になりかねないものです。なるほどこれは自分の欠点である。または自分が悪かったと気がついていても腹をたてます。これは己惚れがさせるものです。

「僕はどうかあっても我慢がならぬ。今夜こそ李氏を殺して呉れるわ！」

將軍が怒鳴ると、李氏の方も負けてはいないで、大声で叫んだ。

「よくもまあそんな大口がきけたものです。地獄へ一緒に行つて見せてやりたい位いです。お前が叔父を殺した罪状書がまだちゃんとしていますよ。その上、妾までも脅かして妻にしているじゃありませんか！ 妾は帝王家の宮人です。妾に何の罪があると言うの

です？」

將軍は黙ってしまった。范敏が間をみて立ち去ろうとすると、巨漢は彼を呼びとめて、「まあまあ、お坐りなさい。貴殿に害を加える様なことはさせませぬ。」

と言うと、次に將軍に向つて言った。

「お客人は衣冠の士じゃ。今日はもう遅いし客人を何処へ行かせようというのじゃ？」

「ごもつともじゃ。お互い、然るべき男一匹じゃによって、争いはやめ、御挨拶を致そ

ひとの振りみて、わが振りを直したいものです。自分を抓つて、ひとの痛さを知りたいものです。ひとの良い点、善い行いには気がつきませんが、その反対のことはよく判るものです。そのたびに少しでも僅かでも、自分を正しく直してゆけば、いつかは一応の者となれることでしょう。日常のこうした努力の程度によつて数年後、数十年後にはとりかえしのつかぬ差異ができます。

また他人の言動から学びとるばかりでなく自分のことは自分で判断しなければなりません。自ら反省し、懺悔することは、二度と再び愚かしいことを繰り返さない決心をするこ

とでもあります。こうして一步步前進してゆくには、謙虚でなくてはなりませんし、また日常の生活を真剣に送る努力がなければなりません。こうなれば自然と他人の言葉がよく耳に入ることになります。

山や谷できく小鳥の声も、木の葉のざわめき水のせせらぎに至るまで、聞く人によって異なるわけも領けるわけです。知識を深め、忠告を求めるのに淡泊であつてはいけません。はつきりと欠点を指摘されたとも、悪い点を注意されたと思わなくても、自ら相手の言葉の中から宝庫を見出すように努めなくてはなりません。

う。」

將軍が声を和らげて言うので、范敏も謝った。

「私ともあろう者が、非礼にも争いをひき起し、真にお恥ずかしい次第です。お許しを得れば幸いで、今夜はおおいに飲を尽しましう。」

すぐさま燭を高く掲げて、酒宴が始った。

「將軍のお住居とも知らずに、誤ってここに泊りました。非礼の段、幸いにお許し下さい。」

「いやいや、お氣にせらるるな。この田權もかつては兵三千の將となり、一夜、韓信の陣營を襲撃しました。血戦は深夜まで続き、兵は尽く仆れ、拙者だけ唯ひとり生還したのです。この手で百余人は殺しましたよ。敵の矢が全身につき刺さり、それこそ蝟同然でしたよ。今ではこんな所で鬱々と暗く過しておりますが、今更何を言わんやですよ。」

つまらぬ怒りは収まって、この夜も范敏は泊ったが、さすがに李夫人は来なかった。

次の日も將軍は范敏を招いて酒宴を開き、例の巨漢も加わった。

「お客人も、こうむくつけき男ばかりでは興が湧かぬでござろう。今日は一つ李氏を呼んで、とりもちをさせましょう。」

將軍が李氏を呼ばせると、李夫人は間もなくやって来て、將軍と范敏との間に坐った。昨日に比べると今日は一段とあでやかで、余計に范敏の方へ身を寄せて酌をするのであった。やがて、酔いに乗じて范敏が笛を一曲李夫人に所望すると、將軍は遮るかの様にひきとって言った。

「甕に美酒あり、皿に乾肉ありで、痛飲こそ真の武人のやることですよ。」

將軍は又々酒を命じた。大きな肉も大皿で運ばれて来た。大盃でぐいぐいやっている李氏は横笛をとり上げて吹奏を始めたが、その曲調には深い憤りと怨みがこめられている様であった。

「いや、に陰気な曲の様だが、何人を怨んでの曲かね？」

將軍が皮肉ると、巨漢房国公が横からたしなめた。

「まあまあ、むきになるな。酒に歌ありで、結構じゃ。何も怒ることはないさ。」

さて、房国公が、詩箋を求めて李夫人宮中にありし日の想い出を一時に託して夫人に贈ると、將軍は不快の色を露骨に示しながら、

「貴公は、この李夫人が旧昔を憶うばかりで、私という者に対する新しい愛のかけらも無いと、どうしてお判りなのじゃ？」

と言った。李氏は忿然として、

「唐の帝と、お前如き小鬼と、何で比べものになりましたしょう？」

とやりこめ、賛意を求めるかの様にあでやかに范敏の方を見かえした。

「昔のことがそんなに良かったのかねえ。まあいいさ、一杯どうだね？」

將軍が李氏に酒をすすめると、夫人は頑なに口を閉じて飲もうとしなかった。將軍が歌を所望しても、これ又そしらぬ顔をしていた。范敏が杯をあげると、今度は求められなくても歌い出した。

將軍は、わなわなと怒りに顫え、顔は死灰の様に蒼白になった。

「よし、歌はもう望まぬわい。どうしても酒だけは飲まして呉れるわ！」

將軍が瓶子を上げてつこうとすると、李夫

人はそれをひったくって、床の上へほうり出してしまった。余りの仕打ちに將軍はかっとなって叫んだ。

「ええい、くそ！ 今夜こそ二人を重ねてぶった切って呉れようぞ！」

「けちな妖怪のくせに、お前にこの妾がどうできるのですか！ お二人がちゃんと見ておいでですからね。」

李氏は、これ見よがしに范敏の上着を引張って、媚びる様なしなを作って囁いた。

「妾、今夜から又貴方のお側でお伽をさせて頂きますわ。ねえ、宜しいでしょう？」

いよいよ逆上した將軍は、はっしとばかり李氏の頬に平手打ちをくわせると、その顔の上へ唾をひっかけ、部屋へ駆けこんで剣を持ち出して来た。

「范敏さま、驚くことはありません。首をのばして刃を受けても、この鬼に妾が殺せるものですか！」

この時、房国公がすつくと立ち上り、又もや將軍の剣を奪い取ると、屋根の上へ抛り投げて言った。

「此奴と来ては、鉄枷を荷い、鉄丸を喰わね

ば、狂気がやまぬとみえるわ！」

この先どうなることかと見ていると、突然空中から大きな声が聞えて来た。

「一千年そのかみの死骨頭！ 年と共に化して土となりし筈なるに、今になお心安まらぬのか？ 李氏また貴家の出身なるものを、何を以てかかる愚賤の鬼と同室致しておるのじや？ 四界の何れかに往生させんと思ひ居たるに、このありさまにては、きつく陰冥の司に報じておこうぞ。將軍の鬼は無間地獄に入らしめて、ここもと三四千年は往生の機なからしめん。范郎の馬を殺し、又その衣料にて酒を買うとは、全く以ってけしからぬ所業と言ふべきじゃ。」

その声が終ると、中空から一捧が下り、酒を湛えた甕をはっしと撃破したと見る間に、人も家も凡ゆる調度も一ときにかき消えて無くなってしまった。

日は将に昏れ落ちんとしていた。周囲には人の影一つなく、荊棘の生い茂った荒野の中には、大小の古い塚が累々と遠くにまで散在していた。

馬はどうしたろうと、あたりを探すと哀れ

肉をはぎとられた骨とひからびた皮だけが残っていた。投げ出してある旅囊の所へかけよって見ると、中にあった筈の衣服類は何一つ残っていない。

果然としている范敏の前に、どこからともなく一人の小童が現われて言った。

「將軍からの伝言です。娑婆の妓楼へ上って遊んでも相当のお金はかかります。貴方は十幾日もここで良い思いをなされたのですから、馬の一匹や衣服ぐらひは廉いものだそうです。」小童は忽ち見えなくなった。范敏は大急ぎでその場所を離れ、二里ばかり歩いてやっと町まで辿りついた。とある通りの酒屋の店先まで来ると、どうも自分のものらしい服が何着か吊してあるのを見付けた。早速その主人公に訊いてみると、その返事はこうであった。「数日前からですが、范五経と名のる人が何回か見えて、その都度この衣服を抵当にして、大分がとこ酒をお持ち帰りになりましたよ。」下僕もそののち見つけ出したが、彼も酒や肉をふるまわれ、酔っぱらって眠っていたので、細かいことは何も覚えていなかったということである。

近代高僧伝

越智専明

大橋 俊雄



怒濤さかまく波風をほど近くに聞く日本海沿いの村、伯耆国東伯郡栄村は由良の浦からさして離れてはいない。ここに専明が河上庄左衛門の二男として生れたのは嘉永三年十月十一日のこと、父母のすすめられるがままに幼にして赤崎専称寺の随誉観道について出家し、明治元年八月には江戸にのぼって増上寺で兩脈を受け一時帰国したが、同五年再び伯父上田貫学をたよって上京し 増上寺の門をくぐった。学にあまりにも熱心であつた彼は、書物として少ない田舎にいては充分に己れの学をのぼすことは出来ない。一層のこと上京し増上寺の学寮でみっしり研鑽にいそしみ

たいという念願が、東京への遊学となつてあらわれた。彼は貞嚴について宗乗や余乗を学んだが、天台は福田行誠に師事したという。越えて同十七年七月北海開教を志して有珠の善光寺に董住したこともあつたが、居ること数年。帰東の後は増上寺山内浄運院に住し、二十三年第一教校の教授となり、二十六年九月には浄土宗高等学院の教授に就任、二十八年第一教校長に推され、三十二年九月宗教大

学教授となつた。

彼は一時北海道の開教に従い、伝道の面に活躍されたというものの、その余は終始増上寺にあつて宗学の研鑽につとめると共に、

山内寺院や学寮に蔵していた記録文書の蒐集と保存に心を用い、自から山内寺院を訪ねて図書目録を作成したこともあり、油ののりきつた莊年の頃は片時も学問を忘れず、学問を愛し、学徒の育英には殊更に意を注ぎ、しかも其の性格は極めて温厚そのものであつた。学生達が研究の成果を報告しても懇切丁寧にただ「結構でした」と申されるのみで批判なされることもない。大正の初め頃であつたらうか。増上寺の黒本尊の前で、諸学匠同席の上勤息義城・神谷大周という当代きつての兩碩学が選択集を初重とするか、往生機が初重かについて論議なされた時も、彼は座に列つていたが唯拝聴するのみであつた。その何れが正しいかについては、全く批判されることはなかつた。これというのもせつかくの研究の積み重ねに対し批判するということはおこがましいことであり、その業績は尊重すべきであるという立場からで、軽々しく批判すべきではないというのが、彼の心念であつたらしい。

しかし同三十八年増上寺執事長となつた頃の彼は嚴格そのもので、早朝から深夜に至る

まで、常に陣頭にたつて衆僧を指揮し本山復興のためにつくし、函館称名寺から是非来て欲しいと招かれても、本山の復興こそ急務であるといつて固辞して行かれなかった。一にも二にも彼の脳裡にひらめいたものは本山の復興でしかなかった。全く彼は縁山の忠僕であつた。縁山に掛錫して、縁山に学功をつみ、縁山の変遷を目撃し、縁山興隆会を設けてその興隆につくされた愛山護法の念は誰人も彼の右に出るものはなからう。その頃の増上寺には道重信教が中心となり、仏学院を創設して大いに講学に専念していたが、時に大衆の中には閑さえあれば碁盤に向つていた人がいた。囲碁三昧はその人にこそあてはまる言葉であつたという。時に専明はその人達を呼びよせ「君達は志を立て、大いになすあらんという大決心をして仏学院に來られたのに、近頃囲碁にばかり熱中しているのはどうしたのか。古来の高僧の伝記を読んでみても碁に没頭した人はないように見受ける。君等は碁を囲む間に書物をよむなり、習字をするなり、詩又和歌絵画等の研究をするなり、何か特長を得るように心がけたらどうだ。行

誠和尚は学徳兼備の高僧として、明治教界の最高權威となつたことは天下周知のことだが、就中和歌に堪能であつたことが一代の教化の上に余程武器となつておる。この辺を少しく考えて君たちも學問芸能に、更に一段の努力をし、光陰を仇にすごさず、何らかの特長をもつようにしてほしい。自分は老境までこの点に注意を欠き、無芸無能でうたた痛恨にたえない。君達は若いから敢て苦言をするのだと切々と申されたこともあつた。

最近の若い人たちは少なまけている。これでは宗門の将来に暗影をなげさせることになるのではないかと心配し、懇々と注意された真摯な態度は、教界混乱の中に生きぬいてきた彼にとって一重に宗門の将来を思う念からほとばしりてたものではあつたが、晩年の彼は前生にくらべ、とかく口数は多かつたという。九品仏に隠棲された頃、彼の堂々たる体軀に「布袋様」というニックネームをつけた人もあつたが、附近の子供達に何かと注意される彼は「おそろしい坊さま」と見られていたらしい。

彼の長所は正直廉潔、また直情径行が彼の

短所で、人づきあいは余り上手な方ではなかつた。

増上寺の大殿が炎上したのは明治四十二年四月であり、この年責をおつて九品仏浄真寺に隠棲した。当時の九品仏は駒沢から数里の道を歩まなければならぬという不便な地にあり、開山堂の近くにあつた念仏講中の宿泊所ともなつた茅葺の二階家に彼は住つていたが、ここに移住してから心にかけたのは本山増上寺の復興であり、奥沢に縁山の別所を建て本山檀家の靈域とされるなど終生縁山のためにつくしたといつても過言ではない。縁山のために、縁山復興のために生きぬいた人こそ専明その人であつた。されどここに移つてからの彼は多少のゆとりもあり、閑暇を得ては孜孜として学徒の教養と浄土宗史の研究に後半生を捧げ、多くの論文をものし、その功は認められて、四十四年己講に叙せられ、大正十年には正僧正勸学に進み、翌十一年九月十四日七十三歳を一期に安養の浄土に旅立たれた。

法名を心蓮社一誉上人念阿珂音専明老和尚という。



二人のやくそく

文と画みなくち・まさひろ

アキちゃんとユミちゃんは近所どうしで学

校もいっしょ、二人とも一年生でいつもはとも仲よしだったのですが冬休みが始ってすぐのある日のこと、お正月に食べるお餅のことから口げんかを始めてしまいました。

「アキちゃん、お正月が早く来ないかしら、待ちどおしいわネ」

「そんなこと言っただってダメだよ。お正月はネ、お餅をついてからでなくっちゃ来ないんだヨ。お正月にはたくさんお餅が食べられていいナ」

「まあ、いやだワ。アキちゃんたら、くいしんぼうネ」

「なに言ってるんだい。ユミちゃんだってお餅を食べるくせに、あーんなこと言ってお上品ぶってサ」

「なにサ、アキちゃんのくいしんぼ!!」

「いいですよーダ、ほくなんかたくさんお餅を食べてうんと大きくなるんだから、ほくンチのお供えでっかいんだゾー」

そう言われるとユミちゃんも黙ってはいません。

「あたしンチのお餅だって白いのばかりじゃなく、赤いのだの草色のだの小さなサイコロみたいでとてもきれいだわヨ。ウチではパパがつくのヨ」

「そんなのなんだい。ウチにだって昔からの大きなウスがあって、それでもってよそよりも大きなお供え餅をおじいちゃんがついてくれんだ……」

とそこまで言ったとき、アキちゃんは急に黙りこんでしまいました。

いるヨ。ユミちゃんのバカ!!」

「まあいやーだワ、もう仏さまになってしまった人がお餅をつくわけがないじゃない」

「それでもちやーんとおじいちゃんがついてくれンダイ」

とアキちゃんは負けずに言っしまいました。

「そんなら、あたしンチのお餅とアキちゃんチのお餅とくらべッコしましうか」

「ウン、いいヨ」

二人はゲンマンしてユミちゃんはアキちゃんの家の大きなかがみ餅を、アキちゃんはユミちゃんの家の赤や草色のあられ餅を見せてもらう約束をしました。

アキちゃんは家へ帰るとお母さんに言いました。

「ネエ、おじいちゃんがどうしたのヨ。アキちゃんのおじいちゃんなんてもういないじゃない!!」

「うそだい、うそだいちゃんと仏さまの中に

「ウチではいつお餅つくの、また今年も大きなお供え餅、つくってくれるでしょう」

「あら、アキちゃん、今年はおじいちゃんが亡くなってお餅をつく人がいなくなってしまったからお母さん

お菓子屋さんにお餅を頼んでこようかしらと思っていたところなのヨ」

「なんだつまんないや、つまんないやイ」

大好きなおじいちゃんのことを思い出したアキちゃんは、とても淋しくなってお母さんにダダをこねました。だってお正月

のお餅つきときには、大きなケヤキのウスから白い湯気があがっているつきたてのお餅をノシ板の上にとりながら、「どおれ、アキ



坊が早く大きくなるように一つお供えの大きなやつをつくらうかな」と言って、特別大きなお餅をつくってくれたおじいちゃん

が、今はもういないのがとても悲しかったからです。お母さんが「アキちゃんさあ一しょにお菓子屋さんに行ってくださいましょう。そんなわからずは言わないことヨ」となぐさめても「いやだ、いやだ、だってほく、ユミちゃんにおじいちゃんのつくったかがみ餅を見せる約束をしたんだもの」とぐずってすわりこんでしまいました。お母さんは笑いながら「それはムリよ、どうしてそんな約束なんかしたの。さあさあ、行きますよ」と言いながら買い物カゴを下げてお勝手口でアキちゃんを待っていました。けれどもアキちゃんがソッポを向いたままなので、お母さんは一人

で行けばおねだりもできたのになアと顔をゆがめました。

ユミちゃんも家へ帰って、アキちゃんと約束したあられ餅のことをお母さんに話すと、「いやーネ、ユミ子ったら、あれは三月のおひなさまのときでしょ。それにパパはお仕事

が忙しくてお餅をついているひまがないから今年はお餅にしましょうヨ」とそう言われてもユミちゃんがききわけのわけがありません。いまとってはとりかえしのつかない約束をしてしまったので、アキちゃんと同じように困ってしまいました。アキちゃんのお母さんとユミちゃんのお母さんがバッタリと出会ったのは、通りのお菓子屋さんの店先きでした。二人とも笑いながらいま聞いてきたばかりの子供たちの約束のことを話しているようです。「奥さん、ウチのユミ子ったらアキちゃんと約束したんだからあられをつくってちょうだいですって。本当に困ってしまいうワ」「そうなのヨ、わたし仕方がないからこのお店にふつうより大きいかがみ餅をお願いすることにするワ」

「あたしンとも、いなかへお手紙して少しばかりあられを送ってもらうことにするワ。あの子たちそれで我慢してくれるかしら」

「二人とも今頃はきつとこまっているでしょうから、このお約束は一まずわたしたちがあずかることにしましょうヨ」

苦楽は偶然でない

ここに三つの間違った考え方がある。一には、前世の宿業によって苦楽が起るといふ主

を知らないで、我まま勝手な生活を送ればよいことになる。かかることは無責任な生活といふべきで真実でもなければ、正当なことで

張である。二には、苦楽は神のおぼしめだといふ考えである。三には、苦楽は偶然に突発するのだといふ考えである。

もし苦楽は偶然に突発するものであるならば、殺生等の破戒の行いも、邪見の起るのもすべて偶然といふことになる。この世に偶然

もし何ことも前世の宿業によるものならば人生には希望もなければ、努力する張り合いもない。教育も修業もつまらないこととなり誰かが為すべきことと、為すべからざること

ということは何一つもないのであって、必ず原因があつて次に結果があるものである。原因のない結果はないのである。もしそうでなければ、人生には希望もなければ、努力もい

を知らないで、我まま勝手な生活を送ればよいこととなる。かかることは真実でもなければ正当なことでもない。

世の中のすべては、原因があり、この原因を育てるものがあり、そしてある結果を生ずるのである。

もし何ことも神の創造であり、苦楽は運命だとするならば、生きものを殺す等の破戒の行為も、誤った思想を持ったり、みだらな生活を送ることも、すべてが神の責任であるといふことになる。もしこれがほんとなら、人

無因無縁ということ、つまり偶然はあり得ない。これらの誤った考え方を推し進めてゆけば、結局はこの世のすべての行為を否定することになる。

生には希望もなければ、努力する張り合いもない。教育も修行もつまらないこととなり、誰かが為すべきことと、為すべからざること

賢者はこの誤りを確めて、人々に正しい見解を持たせねばならない。

「ええそれがいいワ、その代り今日はあの子たちの喜びそうなおみやげを買って帰りましょうネ」

二人のお母さんもアキちゃんとユミちゃんがしたと同じように約束をすると、二人が待っているお家へ急ぎ足で帰りました。

二人とも本当はお母さんと一しょに買い物に行かきたつたのですが、おみやげもいたたたしその上お母さんたちの約束のことを聞いてすっかり安心してしまいました。アキちゃんはお菓子屋さんがお餅をとどけに来てくれたらまず最初に可愛がつてくれたおじいちゃんにお供えしようと思ひました。ユミちゃんは

「ねえ、ママ、あたしいなかからあられ餅を送ってもらつたらアキちゃんにも分けてあげるワ」

と言ひました。

年があけてお正月になれば、きつとアキちゃんは大きながみ餅の、ユミちゃんは赤や白や草色のきれいなあられ餅の前でニコニコしていることでしょう。

童 心 仏 心

桐 淵

輝

一 気にしないで下さい

和夫君は身体の具合が悪く、三ヶ月も学校を休んでいた。近所の人が大変心配してくれるのは嬉しいが、忙しいお母さんをつかまえて、容態やら薬やらお医者のことを話し込んで離さないのには困ってしまった。

うるさい近所。和夫君は苦しい時でも大声を出さなかった。近所の人がすぐ見舞に来さうだからであった。気分の良い時でも散歩に出なかった。近所の人に会って、いろ／＼と聞きただされるのが嫌だった。

「和夫君ちゃんの家では大変ね。大分大金がかかったらしい」

こんな話が近所の家の食卓をにぎわせていたらしい。お母さんは

「少しは、静かに見守っててもらいたい」といっていた。どうぞ、他人のことは余り気にしないで下さい。

二 鳥がまた泣いた

鳥だって泣くことがある。赤ちゃん鳥が、巢の中でカーオカーオと泣いていた。お母さん鳥が飛んできて、赤ちゃん鳥を抱きあげると、ほほずりしてやった。赤ちゃん鳥は泣きやんだ。

赤ちゃん鳥は、やがて大きくなって一人で遊べるようになった。鳥君は転んで怪我をして、またカーオカーオと泣いた。お母さん鳥が飛んできて、どうしたのかと質ねた。鳥君は、怪我をした所をみせて「ここが痛いヨ」といった。

お母さん鳥は、今度は抱き上げてくれないで、だまって外に飛び去った。

鳥君はいくら泣いても、もうお母さんがほほずりしてくれぬことを初めて知った。鳥君は反抗心を持ったであろうか。そうかも知れない。鳥君は独立心を持ったであろうか。そうかも知れない。あなたはどちらであったと思うだろうか。

三 器用と不器用

ある晩、台所で水と電気がしきりといい争っていた。

「水さん、あんたは本当に不器用ね、ただシ

ヤージャー流れるだけだもの」

「ウン、お茶碗を洗ったり、手を洗ったり、飲んでもらったりするだけだヨ」

「そこへ行くと、私なんか器用なものヨ。明るくしたり、テレビ、ラジオ、冷蔵庫、扇風機、その他いろ／＼のものに活躍しているのヨ。私のおかげで生活できるようなものだと思いません」

電気は大いに威張って意気揚々と水を見下げていた。

ところが、それから数日して停電になったので、電気はシュンとして口もきくことができなかった。水は相変らず元気で、井戸からジャージャー流れ続けていた。そしてこうつぶやいた。

「僕は一つのことしか出来ないから、たしかに不器用なんだ。しかし与えられた役目だけはまっしぐらにやる気持はもっている」

器用な人も器用すぎると便利屋といわれ、何も成就しないようである。不器用でも決して嘆く必要はない。

多くのことに気を配らないで専心貫くことが大切である。

銃の使い道

吉野 翠 幹



西部劇は活動写真当時から今日に至るまで映画会社のドル箱だそうである。し

かしテレビのおかげで、今日ほど西部劇が流行したことはなかったであろう。流行は廃れる初めであるから、これがいつまで続くかは別として現に小銃や拳銃の玩具が密輸入されたとか、ある種の玩具が発売禁止になったとかという記事を新聞上で読むとなれば、西部劇の影響が大きいと思うしかない。こうなると玩具といいながら大人のものらしく、何んでも真似てみたがる者のいるのは止むを得ないが、奇妙な服装をして早射ちの練習をするに至っては、ただただがっかりさせられる。

西部劇はたしかに愉快なもので、原野を駿馬が疾駆するのをみていると、もう一度馬に

乗って思いきり曠野を馳ってみたいものだと思う。拳銃の打ち合いも、悪人が何人射つても当たらないが、善人の弾はたった一発で相手を倒すところは、日本の剣劇に似て安心なものである。とにかく話が一瞬できまるところが一般に受けるのである。たしかに恋の悩みやもつれで下手な女優がもつとらしく顔をしかめているのを見るよりは数等面白い。西部劇のルールによれば、悪人といえど背後からは射たないし、女でも小供でも銃さえあれば、いかにあらくれ男が大勢いても必ず手を挙げさせる。こうしたいくつかのルールで組立てられている所がまたよいのである。

銃というものに対する感じ方は、われわれと外国人とは全く違う。これは日本刀に対する感じが違うのと同様であって、先祖から

の体験によるものであろう。日本軍の銃に対する取扱いは、実に大げさなもので塵一つついていてさえ煩さかった。弾に対しても杓子定規であった。かつて拳銃の射撃演習をした時、演習を終って薬きょうが一つ不足していることが解った。そのため全員で射撃場を探し廻り、発見するまで地面を這いまわったことがあった。戦地ですら一戦闘終れば必ず使用弾数の報告をしなければならなかった。そのくせ戦地では小銃が落ちていたのだから不思議であった。

ソ連兵に会って第一に驚いたことは、銃を自分のものとして自由に使用していることであつた。われわれが小刀を弄ぶと同じ位なものであつた。要するに身についているといった感じであつた。彼等は多く自動小銃を持っ

ていた。私たちはこれをマンドリンと呼んでいたが、彼等は射撃が上手であった。雀が止っていたり、鳥が飛んでいたりとすぐ射ってお互に興じあっていた。

興南で昼夜兼行、船の荷役をしたことがあった。船のクレーンは休みなしであるが、港のそれは真夜中になると活動が鈍くなった。高い所で起重機を運転している朝鮮人が、睡くなって手を休めるらしい。すると監督に來ているソ連兵が、高い運転室に向って拳銃を射った。

また興南での收容所で日本の兵士二人がソ連兵士に射



殺された事件があった。收容所は一応有刺鉄線をめぐらしてあったが、塵捨場がその囲いの外にあった。ある日例の如くに一人の兵士が大きな肩かごを持って、その塵捨場に行ったが、いきなり衛兵から射たれて一発で即死させられた。夜の明けきった朝のことであり、毎日塵捨場には出入りしているのだし、

肩かごを持ってそこに行つたので、何んの不審もありようがなかった。私たちは当然ソ連本部に嚴重な抗議を行つた。しかしその夕刻ソ連からの回答は、たとえ如何なる理由によつても有刺鉄線の外に出たのであるから、これを射つた衛兵は、任務を遂行したに過ぎないという簡単なものであった。私たちは齒をくいしばつたが、どうにもならず全くの殺され損で、泣き寝入りの外はなかった。もう一人の場合は夜半のでき事であった。これはたしかに有刺鉄線をくぐつて外に出ようとしたらしい。銃声に驚き、とび起きて行つてみると、有刺鉄線の外側に倒れている者があつた。私たちは同様に射たれるかも知れないと思ひながら、囲いの外に出て、倒れた兵士を抱え込み、私の部屋に連れてきた。軍医に連絡すると同時に、私は鉄で兵士のスボルを切り開いた。尻の部分にポツカリ穴が開いていたので、弾は鼠蹊部を貫いたらしい。しかも運悪く動脈が切れたと見え、夥しい出血であつた。私は兵士の上半身をしつかり抱きながら「何かいう事はないか」と怒鳴つたが、彼は私の顔をみつめるばかりで一言も発しなかつた。私は水をとり寄せ、僅かに口に注ぎ込んでやつた。ドクドクと血が迸り出る毎に、彼の顔から目に見えて血氣がひいて行つた。射れてから五分位経つたのか、十分位だったのか、とにかく彼は私の膝の上で睡るよう息を引きとつた。

これが逆に日本の軍隊であつたら、三度「誰か」と誰何して、返事がなければ射つてよいということになっていた。つまり三度誰何しないで射つてはいけないのである。ソ連兵は黙つて射ち、一発で殺してしまつた。どちらが善いか悪いかでなしに、これが日本とソ連の相違であつた。

さて、余談になるが、日本刀については彼らは少なからず畏敬の念を持っていた。終戦後に武装解除は当然のことであつたが、ソ連軍は日本将校から日本刀を取り上げなかつた。従つて乗船の時に、一時預りたいというのでソ連側に日本刀を渡し、それっきり返しはしなかつたが、それまでは相変らず日本刀を腰にぶらさげていた。

私たちがソ連軍と会つたのは、私たちのいた飛行場にソ連機が初めて着陸した時であつ

た。私は水をとり寄せ、僅かに口に注ぎ込んでやつた。ドクドクと血が迸り出る毎に、彼の顔から目に見えて血氣がひいて行つた。射れてから五分位経つたのか、十分位だったのか、とにかく彼は私の膝の上で睡るよう息を引きとつた。

これが逆に日本の軍隊であつたら、三度「誰か」と誰何して、返事がなければ射つてよいということになっていた。つまり三度誰何しないで射つてはいけないのである。ソ連兵は黙つて射ち、一発で殺してしまつた。どちらが善いか悪いかでなしに、これが日本とソ連の相違であつた。

さて、余談になるが、日本刀については彼らは少なからず畏敬の念を持っていた。終戦後に武装解除は当然のことであつたが、ソ連軍は日本将校から日本刀を取り上げなかつた。従つて乗船の時に、一時預りたいというのでソ連側に日本刀を渡し、それっきり返しはしなかつたが、それまでは相変らず日本刀を腰にぶらさげていた。

私たちがソ連軍と会つたのは、私たちのいた飛行場にソ連機が初めて着陸した時であつ

た。この初対面で私の双眼鏡と写真機はとりあげられてしまった。その後になつては、小刀、鋏、剃刀に至るまで没収された。それなのに日本刀はそのままであつた。また佐官級の将校がよく日本刀を見たがつた。まるで剃刀の切れ味を試すような手つきで、恐る恐る触れてみた。そして私に返してよすが、その動作をみていると、実に丁重であつた。またある時数日間にあたる行軍をしたことがあつたが、その時にソ連兵が日本刀を気味悪がつて仕方がなく、私どもは鯉口を紐で固く結んでおいて、安心させたものだった。

○

話を銃のことにもどすが私が、銃をつきつけられたことが二回、また銃をつきつけるのを見たことが一回あつた。

平壤で汽車（貨車）に乗つて東海岸に向う途中、日が暮れてある操車場にとまった。多分白山に近いと思われる山の中であつた。これから先、列車はどこまで行くのか、またいつここを発車するのか、護衛のソ連兵に聞いても誰も知らなかつた。彼等の答えは機関車がくれば発車するのだという、解つたような

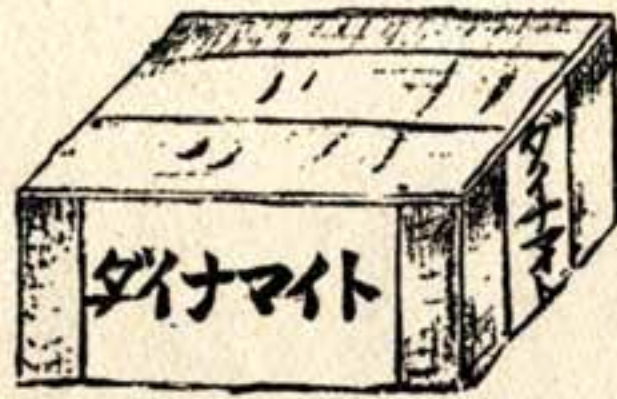
解らぬ話であつた。平壤からここまで来るまでに擦違つ列車は、どれもこれもこぼれるように超満員であつた。機関車の囲り、連絡機の上はもとより客車の屋根まで鈴なりに乗つていた。これではいつ機関車がきてくれるかわからない。それにも増して心配なのは食糧であつた。私たちは夕食をとつていないし、食物はもとより持つていなかった。この先幾日旅が続いても、絶食のまま頑張るしか方法がなかつた。

こんなことを考えている内に、月も山かげにかくれ、車の内も外も真暗になつた。夜も更けたことだし、睡ろうかと思つてゐる時、貨車の入口にソ連兵が二人現れ、責任者は誰かといつた。私が出て行つて応待したが、早口で何かいい張つてゐるので、その意味がさっぱり解らなかつた。相手の言葉が解らない以上こちらも解らせる事はないし、黙つてゐるのも癪の種であるから、何が何やらまくし立ててやつた。その内彼等は、何か欲しがつてゐる様子なので、尚更に衛兵の巡回までの時間かせぎと思つて相手になつてゐた。こうした私の態度に腹を立てたか、いきなり銃の

安全装置を外すと、引き金に指をあてて、銃口を私の胸もとにつきつけた。とつさに私はこ奴射つかも知れぬと思つた。

それと同時に、他の一人のソ連兵は懐中電灯をつけて、いきなり車内に飛び乗つた。何やら車内を探してゐたが、やがて目的を達したのだろう、二人揃つて逃げて行つた。その後姿をみて、長靴を二足盗つて行つたことを知つた。しかも一足は私の真新しい長靴であつたし、もう一足は曹長のものであつた。私たちにとって靴は何より大切なものである。素足で行軍ができるわけもなし、盗られたとなると、さてこれから先きをどうしたらよいか、全く見当もつかず暗然たるものであつた。しかし考えてみると、昔の貴族が狩猟にはいたような立派な革の長靴を、敗けた私どもが用いてゐるのも奇妙であつた。ソ連の将校も兵士も同じ長靴を用いてゐたが、これは甲部だけが革で、筒革の部分はズックであつた。いわば布製の長靴であるが、靴で戦争の勝敗がきまるわけもなかつた。支那兵は運動靴に似たズック製の靴を用いてゐたが、支那も遂には戦争に勝つてゐる。

ただ 私どもがアングレンで配給になった
編上靴には恐れ入ってしまった。初め黒靴の
配給があるというので喜んだが、いざ手にと
って見て驚いた。甲部のズック製はよいとし
て、底部が一枚板であった。つまりこの靴を
はくと、足の裏に一枚の木板を張りつけたと
同じことになるので、とても歩けたものではな
かった。これを履いて
重労働に従事し、ノル
マを稼ぐとなると、一
体どうなることになる
だろう。私たちは靴を
眺めながら長嘆息した
が、仕終いにはお互に
顔を見合せ、吹き出し
てしまった。



もう一回の、私が銃をつきつけられた話は
アングレンでの作業場であつた。その時は、
約四十名程の班を引率して、溝造りの穴掘り
作業に従事した。私は初めてその作業に行っ
たのだが、監督としては何かの都合から、一
日も早く溝造りを完成したかったらしい。そ
こで監督は、私どもの班が初めてきたのをよ

いことに、何とか残業させたいと思って、
護衛兵と相談していたらしかった。

とにかく午後五時になったので、私は作業
をやめ、帰るために隊伍を整えさせた。する
と監督がきて、今日の作業振りが悪いとか、
残業の必要があるとかしきりにいい張った。
しかし私は知らぬ顔をして帰ろうとしたが、
今度は護衛兵が腰をあげなかった。

八時間労働を終れば帰る帰らぬはこちらの
勝手であつた。ノルマが達成できなければ、
受け取る賃金が少ないだけで、これまた私の
責任であつた。監督は作業の内容について監
督するわけで、何も監督に義理だてる必要は
少しもなかった。また衛兵はラーゲルを出て

から帰るまでの人員に異常があるかないかに
ついて責任があるだけで、作業のことに関知
すべきでなかった。もともとソ連ではこの業
務分担が明瞭になっているし、責任感が強い
そのかわり係りでないものに何を聞いても解
らないがお互の責任範囲を守って、他のこと
に口出しをしないのが常であつた。

衛兵が腰をあげてくれねば、私たちはラー
ゲルに帰るわけにゆかない。私は故意に大声

をあげて「折引け」と号令した、兵士たちは
隊伍を組んだまま座り込んだ。こうした三者
が睨み合っていると、いきなり衛兵が立ち上
り銃に実弾を込め、引き金に指をあてて、銃
口を私の胸につきつけた。私はまさか射たな
いだろうと、平気？ で睨み返していると、
衛兵の顔が段々に変って青くなってきた。物
のはずみということがあるので、私もいささ
か心配になり出し、それとなく兵士の方を振
り向くと、誰となく一人立ち、二人立って、
やがて全員が私の指示を待たずに穴掘りを始
めてくれた。

○

アングレンの作業は多種多様であつた。し
かしこれらは露天掘りによる炭田開発と、そ
れに伴っての都市建設であつた。この炭層は
層というより巨大な炭塊であつた。アングレ
ン川はこの炭塊の上を流れているので、一方
で表土を掘り起す工事をし、他方でこの川を
塞止める工事があつた。川を塞止めるには、
はるかに迂回した運河を掘って、川の水をそ
れに流すしか方法がなかった。従って十四、
五軒にも及ぶ運河を掘ったのである。

このアングレン運河がようやく出来上り、いよいよ通水を行った。当初は私どもも、水が流れる流れるとあって喜び、毎日水量の増してゆくのが楽しみであつた。ところが厳寒もすぎ、雪が雨になり、まもなく山の雪もとけ始めようとする頃になって、川が増水し、運河が阿修羅のように荒れ狂い始めた。この運河は場所によつては深さ十数米に掘られ、巾も二十米はあつた。ところが全部が素掘りで護岸をしていないから、水が増して一カ所で土がくずれたとなると、水は決してまつすぐに流れるものでなかつた。

即ち一部の決潰は、次々と他の決潰を呼ぶことになった。運河の下流は平地であつたがまた勾配が稍急になつてゐた。そのためにこの決潰は、水流の蛇行をますます大きくしあちらの角がドドット潰れたとみている内に、こちらの角が大音響をあげ地を震わせて潰れて行つた。何軒もなかつたが、そこにあつた家屋の如きは、マッチ箱を濁流に放り込んだ如く、一瞬の内に転落し、そのまま流されて行つた。アレヨアレヨと見守るばかりで水の力という自然の暴力に対しては、全く勝

負になるはずもなかつた。せいぜい大きな石を集めては、淵となりそうな所に投入してみたが、わけもなくゴロゴロ流されて行つた。深夜突然の招集をうけて出掛けてゆくことも何回となくあつた。そんなある晩、薬缶でウ

オッカをご馳走になり、ただ一回だけでもウオッカの味を知る機会となつた。日本酒を飲むようにして、ついチビリチビリやつた。すると相手は「それは違う。こうして飲むのだ」と映画の酒場でみるように一息でコップをあけてみせた。しかし強い酒であるから、うまく真似なれなかつた。しまいに相手は明かに不愉快な顔をした。恐らく相手の好意を受け入れぬように思われたのであろう。私は兵士たちが寒い深夜に水に濡れて作業していることと思えば、惜しいウオッカでも一人ご馳走になつてゐるわけにゆかなかつた。

ほんとに雪融けが始まらぬ内に、この運河の通水を止めなくてはならなかつた。それに水をもとの通りアングレン川に流さなければならなかつた。運河の取り入れ口にはトラツクを総動員して土を運んで埋めて行つた。それと同時に一度閉鎖したアングレン川との

境界を爆破することになった。爆破する個所は水深が胸まで位で、深くはなかつたが、流れが渦巻き困難な作業であつた。

この爆破作業は、幸いわれわれを使用せずに、囚人部隊の作業であつた。六人位が一組になり、お互の身体を一本のロープに結びつけ、ロープの末端は陸の者が保持してゐた。二人目と三人目が水中ダイナマイトを抱え、他の者が流れに抗して川の中央に進んで行つた。春すぎといつても、水温は低く身体がまっ赤になつた。危険でもあるし、作業は困難を極め、いかに囚人でも肌を刺す冷たさの中に入つてゆくのは大変であつた。

中には元氣を出して水中に入つてゆく組もあつたが、多くは嫌つて仲々入らなかつた。そんな時、衛兵たちは嫌がる囚人に銃をつきつけ、銃で押し込むようにして囚人を川の中に入れていった。この爆破作業は幾日も続いたが、結局水をアングレン川にもどし、運河の危険が去つた。しかしその幾日間というものの、日夜爆音が続いて聞えた。この音を聞く度に、銃をつきつけられて水に入つてゆく囚人の姿が目に見えて浮ぶのであつた。

表紙の写真

国宝 菩薩半跏像（寺伝如意輪観音）

木造 像高一二八釐 京都宝菩提院蔵

お寺というものは非常に複雑なものである。有名なお寺ならその成立も現在までいたる経過も大体わかるのであるが、このような

大寺は全体からみればほんの一部であり、大部分を占めるほとんどの中小寺は正確なところ全くわからない。お寺そのものがわからないのであるから、ましてその本堂に安置されている仏像も、銘のあるものは別として、何

のために、どのようにして、誰が作ったものかわからないものが多い。そしてそれがいつしか伝説的なものになって行くのである。日本中何処に行っても弘法大師作のものや、慈覚大師、さては恵心僧都など、有名な僧侶が造ったという仏像が多い。その中にはもちろん本物もなくてはならない。本物まで行かなくとも製作年代が古い仏像もある。けれども、ほとんどのものは偽物といってよいであろう。

大抵のお寺は、その宗旨によって本尊様が決っているのである。浄土宗なら阿弥陀様、

真言宗なら大日様、不動様というように。しかしそのお寺が、合併されたり、途中から宗旨がえをしたりすると想像もつかない仏様が出て来るのである。そればかりではなく、檀信徒から寄贈されたり、廃寺から持ってきたりするとさらに複雑になってくるのである。

京都宝菩提院にあるこの像は、木造一二八釐の菩薩半跏像であるが、寺では如意輪観音と呼んでいる。如意輪観音でも弥勒菩薩でも、半跏の像の場合には、普通左足を踏さげて右手を頬に当てているものであるが、この像は全くその逆である。

華やかに結び上げられた宝髻は、現今モードの都バリーで最先端を行っているような感じを与える。いやそれよりも一歩前進した見るからにすっきりする清潔感を与えて実に美しい。彫りの深い眉の下に黒石をはめ込んだ伏目がちの両眼、何処でも見かける鼻、そして庶民的な口、という顔は、全く健康そのもので何となく親しみ易い感じがする。また肉づきのよい身に台座まで垂れる衣文をまとった姿はいうにいわれぬ魅力がある。それにしてもこの菩薩半跏像は、本跡はもちろんのこ

と、台座の円錐形の蓮肉部まで一本で彫り出されている。この緻密なしかも円熟した手法そして表現は、いわゆる平安初期の特色である。しかもこの像は日本化されたものではなく、平安時代になって新らしく入って来た唐様のものをそのままうつしたものである。

飛鳥時代や奈良時代には仏像の姿を規整した儀軌がはつきりとなかった。しかし平安時代になるともうそんなことはなくなるのである。それなのに宝菩提院の菩薩半跏像は、両手は掌を開いた与願と施無畏の相を表わしている。全く珍らしい仏像である。

宝菩提院の寺地は、かつて薬師如来を祀った願徳寺の跡である。つまり廃された願徳寺のあとに、鎌倉時代になると京都の東山三条から宝菩提院が移ったのである。恐らくこの菩薩半跏像は宝菩提院にもとからあった仏像ではなく、旧願徳寺の脇待だったものである。そういえば宝菩提院では如意輪観音といっているが、心もち上体を右に傾けているから、本尊薬師如来の右側に侍した月光菩薩であつたかもしれない。どうもそういう気がしてならない。（鈴木成元）



いつでも ひとつでも

竹 中 信 常

一、看板にいつわりなし

昔から、薬の宣伝は大げさになりやすい。胃腸薬にしても、頭痛薬にしても、のめばピタリとなおるように書いてある。法律では過大広告はとりしまっているそうだが、売らんかなのコマースャリズムは、そんなくらしいのことは一向に平気である。薬と化粧品は宣伝で売れるとばかり、ジャンジャン広告している。

「看板にいつわりなし」などという良心的なものは一つもない。こうした風潮はひとり商業の世界にかぎったことでなく、近頃では、宗教の世界にもさかんになって来た。試みに、新興宗教々団から発行している新聞や雑誌をひろげると、紙面の大部分は「御利益」話で埋まっている。不

治の病といわれるガンがなおったとか、胃かいようが切らずに快癒したとか、就職が出来た、入学が出来たといったことはザラであり、中には、隣りまで焼けて来た火事がピタリと消えたとか、水害やがけ崩れをまぬがれたなどといった話が一杯のせられている。これが全部本当なら、世の中に病人は一人もいなくなり、災害はなくなってしまおう。

世の中がすべて、こうしたオーバーな気分になって来ると、当り前のことではおどろかなくなってしまう、かえって不感症におちいってしまうものである。

宗祖が念仏信仰を鼓吹されたころも、世の中の乱れや不安に乗じて、仏教の諸宗では、かなり大げさな宣伝をしていたらしい。そうしたなかに、新たに念仏をひろめようと

されたのだから、なかなか御苦勞があつたにちがいないしかし、宗祖はそのひとがからいっても、識見からいっても、他の連中の尻馬にのるようなことはしなかった。むしろ、その逆に、「実質主義」でゆかれた。いわば「看板にいつわりなし」の堅実な布教をされたのである。過大広告に不感症になつていた当時の大衆は、この良心的な実質主義な宣伝にとびついたのである。良心的な実質主義とは何かといへば、それは宗祖が選択集の第五章で述べられている、念仏の利益、ということである。

無量寿經の下巻の「仏、ミロクにつげたまわく、それ彼の仏（阿彌陀仏）の名号を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、まさに知るべし、この人は大利を得たりとなす。すなわちこれ無上功德を具足す」とあるのを引用されて、念仏に絶対無上の功德のあることを示めされているのである。

ところで、どこが良心的であるかという点、それまでの、相手かまわずに、またどんな病氣にでもきくのだからという広告ばかりだったのを、宗祖は相手の病名と病状によつて、こまかく説き示めしておられるのである。すなわち念仏を申す側の人間に三つの部類があつて、同じでない。いわばその病状は同等でないから、これをはっきりと区分

されたのである。何でもかんでも注射一本で押しとおすという非良心的な医師とはちがう。

「たづぬるにそれ、仏意は正直に念仏の行を説かんと欲すといへども、我にしたがいて、一往菩提心等の諸行を説きて、三輩の浅深不同を分別す」

といわれているのである。三輩、すなわち念仏を申す凡夫の側にちがいの出て来るのは「隨他意」——仏が衆生の身になつて考えられてのことなのである。医師が患者の立場に立つてみるのと同じである。

それでは実質的な点はどうか。いま述べたように、実際の現状にあてはめてみると、患者の病状は一樣でなく、従つて、これにすべて同等の薬を与えるわけにはゆかない。色々に調剤しなければならぬ。しかし、そのもとになつてゐる、主なる薬剤は「念仏」なのである。実質的には「念仏」なのである。しかも、病状によつて念仏という薬を増したりへらしたりして、適当な量にする。観念法門には次のように述べられている。

「日別に一万遍仏を念じ、またすべからく時に依りて浄土莊嚴のことを礼讃すべし。大いに精進すべし。三万六十万を得るものはみなこれ上品上生の人なり」

「すでに一念をもつて一の無上とす。まさに知るべし。十

念をもって十の無上とし、また百念をもって百の無上とし、また千念をもって千の無上とす。かくの如く展転して少より多に至り、念仏恒沙（無数）なれば、無上功德も恒沙なるべし」

いくらよく効くからといって、一回だけでよろしいというわけにはゆかない。念仏という実質の積み重ねが説かれるところに、浄土宗の念仏が、実際に人々を往生にまで導くことが出来る原動力があるのである。

二、ソロバン仏教

世の中が進んで、昔の、古くさいものはドンドン見捨てられる時代である。しかし、それだからといって、何でもかんでもみんな駄目になるかというところ、決してそうではない。昔のもの、古いものでも、よいものはいつまでも残る。リバイバルブームなどといって、この頃では、ヤタラに昔のものが、もてはやされることもあるが、もっとマジメな意味で古いもの、よいものはすたることがない。電子計算機が発達して、とほうもない大きい数が数秒間で計算されるようになったとはいえ、一方では依然としてソロバンがはばをきかしている。電子計算機のような高価で、巨大なものはいくら便利でも、そう簡単に手に入れたり、持ち運

びが出来ぬ。そこえゆくと、ソロバンは至極簡便で自由である。いまだにお店の帳場や事務所の机の上に、一つや二つは置いてある。宗祖は、電子計算機のような高価な、大げさな仏教ではなしに、誰でもが、どこでも簡便に出来るソロバンのような仏教、すなわち口称専修念仏が、いそがしい日々の生活に追われている民衆にふさわしいものであるかを見抜かれたのである。そして、無量寿経の文を証拠として、念仏こそ、いつの時代にもすたることのない、永遠の価値あるものであることをお示めしになっているのである。まず、無量寿経の下巻に

「当来の世に経道滅尽せんに、我れ（仏）慈悲哀愍をもつて、ひとりこの経（無量寿経）をとどめて、止住すること百歳ならん」

なぜ、無量寿経だけがいつまでも残るのかというと、それは、その中に「念仏」の教えが説かれているからである。「……この経は所詮は全く念仏にあり。……しかばすなわち、この経の止住はすなわち念仏の止住なり」

念仏は、いわばソロバン仏教なのである。なぜソロバンなのか。それは常に身近かにあって、いつでも役に立つからである。時代の変化や社会環境のいかにかわりなく、私共の生活に役立つからである。いってみるならば、

ソロバンは電子計算機よりも私共一般民衆の生活にとって、因縁が深いのである。切っても切れないあいだがらにあるからである。念仏もまた、私共凡愚な大衆の信仰生活と深い結びつきを持っていて、しかも、末法という悪い時代には一そう、こうした点が大切になって来るのである。このことを宗祖は次のように述べられている。

「……まさに知るべし。諸行往生（念仏以外の道）は機縁最も浅く、念仏往生は機縁はなほだ深し。しかのみならず諸行往生は縁少く、念仏往生は縁多し。また諸行往生は、近くは末法万年の時にかぎり。念仏往生は遠く法滅百歳の代をうるおす」

少しくむずかしいことばを用いるなら、このように無量寿経が他の諸経がすたれたのちまでも用いられるということ、従ってそこに説かれている念仏がいつまでも価値あるものとされるといふことは、念仏が超時代的価値、すなわち絶対的価値を持つことを物語っているといえよう。そして、このように、念仏が超時代的であるからには、末法の時代だけに有効であるというのではなく、正・像二法の二時にも同じく有効であることは当然である。重病によくきく薬は、むろん軽い病にもよくきくのと同じである。選択集の本文についてみるならば、第六章段の末尾に次のよう

に書かれている。

「問うていわく、百歳の間、念仏をとどむべきこと、その理しかるべし。この念仏の行はただかの時機（末法）にこゝろむるとやせん。はた正像末の機に通ずるとやせん。答えていわく、ひろく正像末法に通ずべし。後（末法）をあげ今をすすむ。その義（意味）まさに知るべし」

三、心の反射鏡

念仏が時代を超越しているということは、ひらたくいうならば、釈尊在世の昔から、宗祖法然上人の頃はむろんのこと、現在、宇宙船のとびちがう時代になっても、念仏の光りはいささかの変わりもなく、私共凡愚の衆生を照らしているということである。宗祖は第七章段、「弥陀の光明、余行の者（念仏以外の者）を照らしたまわず、ただ念仏の行者を攝取（救いとる）したまうの文」をお書きになっているのである。

昨秋、ヨーロッパ旅行の際、生れて始めてジェット機に乗った。地上一万メートル以上の成層圏をとべば、太陽にそれだけ近くなるのだから、さぞかしあかるくなることだと思つたらとんでもない。その逆で、四辺は深い暗紺色で夕暮れのような感じがした。考えてみたらそれは当然のこ

とである。光線というものは、それ自身は目にみえないものなのである。何かものに当たると、それが反射して、始めてひかるのである。成層圏にはほこりや塵がないから、ひかりを反射しない。地上に近づくにしたがって、空気中に色々のものが浮遊していて、これが太陽の光線を反射してあかるくなるのである。

わたしは、ジェット機の窓辺に坐って、しみじみとこう考えた。お念仏もこれと同じなのだ。阿彌陀仏は無量寿無量光である。阿彌陀如来のひかりは太陽の光線のように、季宇全体にひろがっているのだ。むろんわたくしの上にも届いているわけである。ところが、この阿彌陀如来のひかりも、真空ではそのまま通りすぎて反射しない。ところが、私共の心の中に、このひかりを反射させるものがありさえすれば、弥陀の慈光はそれがやきを示めすことになる。してみると、如来の慈悲も、これをうける人の心の持ちかた一つで、かがやきもすると、そのまま通りすぎてしまいもするわけだ。それなら、如来のひかりを受けとめて、かがやかしくするものは何だろう。

「問うていわく。つぶさに衆行（色々の道）を修して、ただよく廻向すれば皆往生を得。何をもってか。仏光あまねく照らずにただ念仏の者のみを摂する。なにごころありや

（どうしたわけか）答えていわく。これに三義（三つの意味）あり。一に親縁をあかす。衆生行を起して、口常に仏を称すれば、仏すなわちこれを見たまう。身常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見たまう。心常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまう。彼此（仏と衆生）の三業あい捨離せず。故に親縁と名づく……」

太陽のひかりも、これをうけて反射するものがなければひからない。これと同じで、阿彌陀如来のめぐみのひかりも「念仏をとなえる」という反射作用がなければひからないのである。からだのことばとところとの三つが、阿彌陀如来の慈光を反射する心の鏡というわけである。念仏は古くさい。念仏は役に立たぬという人は、この「心の鏡」を持っていない証拠である。

宗祖の詠まれた数多くの和歌の中で、次に掲げる歌が、まさしくこのことをありのままに示しており、それ故にこそ、「宗歌」として、浄土宗のものは必らず覚えていなければならぬ歌とされているのである。深く味合ってみることが大切である。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ。

（文学博士）

あとがき

◇佐藤賢順先生の玉稿は、NHK宗教の時間に放送されたものの速記です。三部経のうちの阿弥陀経の部分頂きました。

◇久家惺道先生は今般浄土宗教学部長になりましたが、ご自坊のご経営のかたわら、弁護士を開業されています。

◇先般、百貨店で円空展が開かれたりして、円空ブームというところであります。石上善応先生から円空仏の紹介頂きました。

◇竹中信常先生の聖典講義は、まさにお念仏の核心にふれて頂きました。難解の書を講義して下さいさるご苦心に感謝します。

◇牧尾良海先生の中国綺談は、従前のものより稍長篇ですが、綺談で短篇をという、ほんとに難しく、しかも何れも初めて和訳されたものばかりです。

◆信仰のめばえをつちかう◆

—みほとけのおしえ—

よいこのいっしゅうかん

ひめくり式七曜表
B5版 九葉
三〇円 一〇円

表紙画／のざわ ともかつ
本文画／おぎはら ひろし

日・てを あわせて

月・きょうも ニコニコ げんきよく

火・きそくを まもる

水・せいけつ せいとん

木・わになつて みんななかよし

金・よい ことば

土・よろこびと はんせい

・ねんじゅう ぎょうじ表

運動会の賞品に／稚児参加の記念に／年末施本に百部以上より貴名 行事記念の印刷
その他の御奉仕うけたまわります。

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 大道社

電話 八三三二V五九四四

振替 東京 八二四七

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年十一月廿五日 印刷

昭和三十六年十二月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人讃仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラク☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

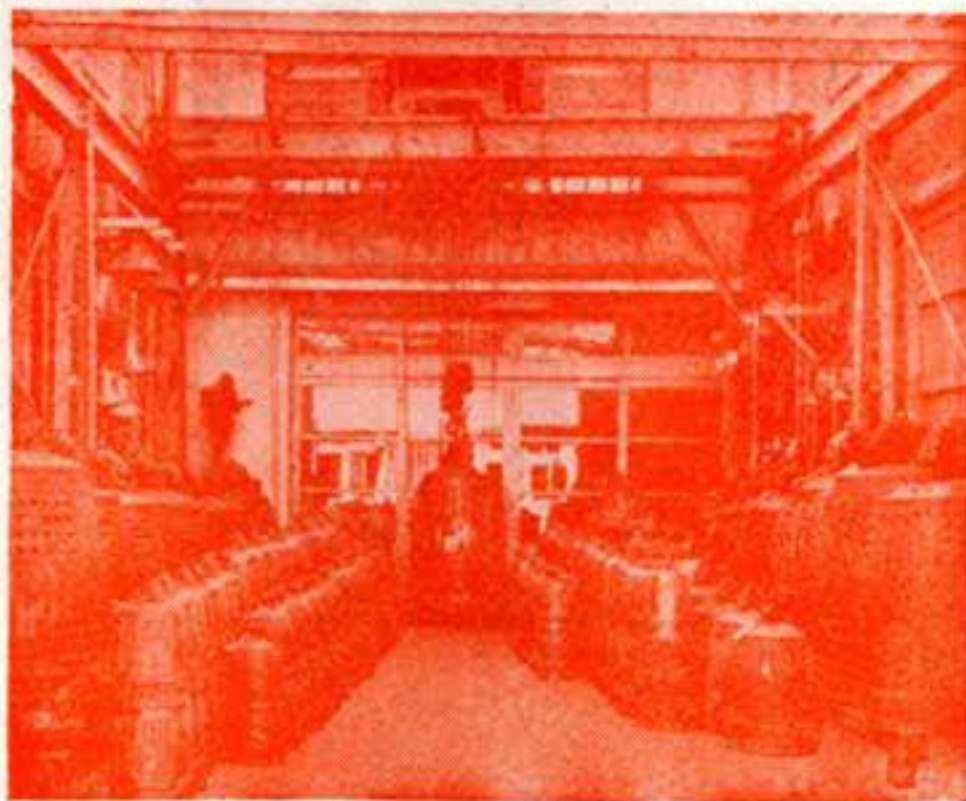
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目
大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田